

西の入遺跡

NISHI NO IRI SITE

篠八田遺跡

SHINOHATTA SITE

八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書

1992. 3

山梨県教育委員会

山梨県農務部

西の入遺跡

NISHI NO IRI SITE

篠八田遺跡

SHINOHATTA SITE

八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書

1992. 3

山梨県教育委員会

山梨県農務部

序

本報告書は、八ヶ岳広域農道建設工事に先立ち1991年度に発掘調査された山梨県北巨摩郡高根町堤字西の入に所在する西の入遺跡および同郡小淵沢町上笹尾字篠八田に所在する篠八田遺跡について、その成果をまとめたものであります。八ヶ岳広域農道建設事業は、須玉町より高根町、大泉村、長坂町を経て小淵沢町に至る大規模な事業であり、この事業に伴いこれまでに当埋蔵文化財センターでは須玉町西川遺跡をはじめ、高根町妻ノ神遺跡、長坂町中込遺跡、大泉村小坂遺跡の発掘調査を実施し数多くの成果を上げております。

西の入遺跡は1989年度、篠八田遺跡は1990年度の試掘調査によりそれぞれ確認された遺跡であります。

西の入遺跡は八ヶ岳南麓に見られる八ヶ岳大噴火によって作られた流山の一つである堤山の南裾部、標高850 mに所在しております。発掘対象地は1300㎡であり、調査の結果、縄文時代中期の土坑1基、時期不明の溝状遺構1条がニ区において確認され、遺物は縄文時代中期の土器が中心を占めております。特に発掘区南側地点（イ区内）において検出された遺物は南北に走る谷部にみられる流石の間より多量に出土していますが、これらは流れ込みと思われる、本遺跡よりも北部に遺跡の中心があることがうかがわれます。

篠八田遺跡は女取川によって開析された河岸段丘上の標高900 mに立地しています。調査は幅約9 m、長さ40 mの範囲（360㎡）において行われ、縄文時代中期の住居址1軒が確認されました。遺物は縄文時代中期後半の曽利式期の土器が中心に出土しており、土器の量は全体的には少ないが、住居址内から若干まとまった資料が検出されました。また今回の発掘調査によりローム層上面において幾筋もの自然流路が確認され多量の流石が検出されました。この流路は大規模なものであることや、ローム層上面に見られることから縄文時代の遺跡とのかかわり、すなわち縄文時代の自然環境と人間とのかかわりを考える上で非常に重要なものであります。今後八ヶ岳南麓における発掘調査が進むなかで、このような視点にたって遺跡のあり方を考え、当時の社会を復元していくことが期待されます。

本報告書が、多くの方々の研究資料としてご活用いただければ幸甚です。

末筆ながら、ご協力を賜った関係機関各位、並びに直接調査に従事していただいた方々に厚く御礼申し上げます。

1992年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯 貝 正 義

例 言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡高根町堤字西の入に所在する西の入（にしのいり）遺跡および小淵沢町上笹尾に所在する篠八田（しのはった）遺跡の報告書である。
2. 本調査は、八ヶ岳広域農道建設工事に伴う事前調査であり、山梨県農務部の負担金と文化庁の国庫補助金を受けて、山梨県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターで行った。
4. 執筆は、第1章第3節の遺物及び、第2章第3節の遺物を浅利が、その他は保坂が行った。
5. 出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管している。
6. 発掘調査から報告書作成にいたる過程で、以下の方々から御教示、御協力をいただいた。記して感謝の意を表す次第である。（敬称略）

雨宮正樹（高根町教育委員会）、佐野勝広（小淵沢町教育委員会）、矢島正純（峡北土地改良事務所）

凡 例

1. 図版縮尺は下記に統一した。
遺構図……住居址：1／60 土坑：1／40 溝：1／80
遺物図……土器：1／6（実測図）、1／3（拓影図）
石器：1／3、2／3（小型石器）、1／6（石皿）
2. 遺構図内のスクリーントーンは焼土を示す。
3. 土器の断面図のスクリーントーンは繊維の含有を示す。
4. 石器のスクリーントーンは磨ってある面を示す。
5. 図中のドットマークの意味は以下のとおりである。
□…………石器・剥片 ●…………土器
6. 石器実測図中の注記は以下のとおりである。
上段……出土地点（遺構出土のものは表記なし）
中段……石材（「黒」は黒曜石を示す）
下段……重量（単位はg）

目 次

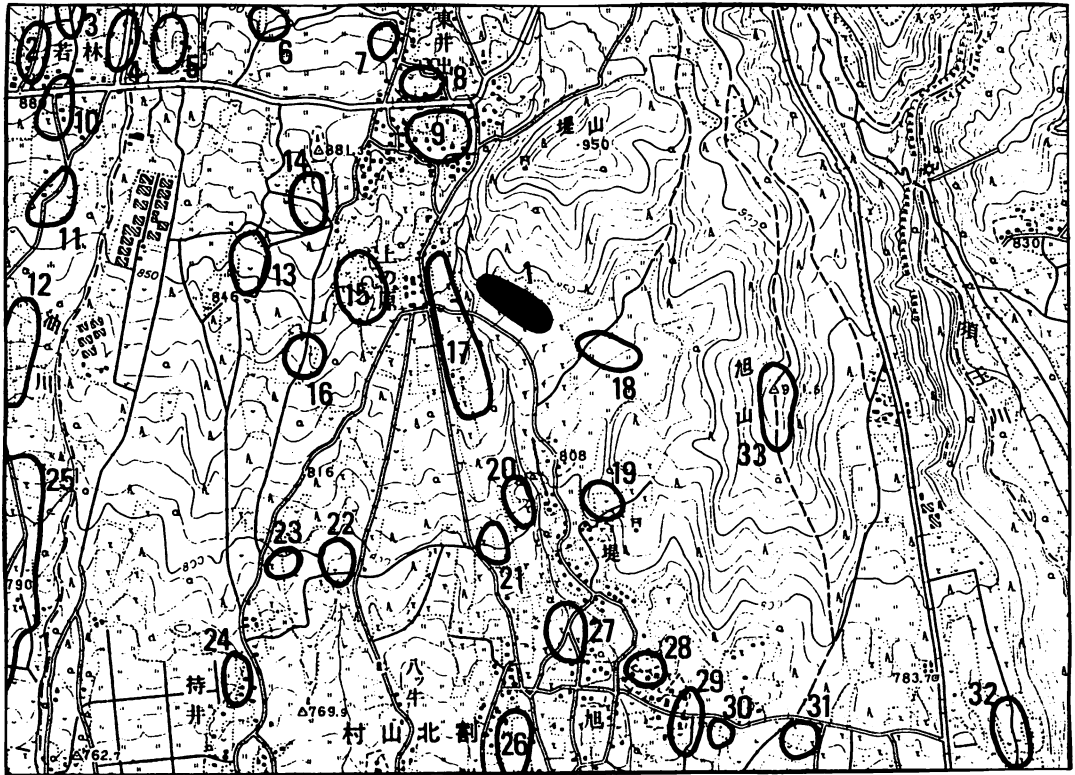
序文	
例言	
第1章 西の入遺跡	第2章 篠八田遺跡
第1節 調査に至る経過と組織	第1節 調査に至る経過と組織
1 調査に至る経過	1 調査に至る経過
2 調査組織	2 調査組織
第2節 遺跡の概要	第2節 遺跡の概要
1 遺跡の立地	1 遺跡の立地
2 周辺の遺跡	2 周辺の遺跡
3 調査方法	3 調査方法
4 基本層序	4 基本層序
第3節 遺構と遺物	第3節 遺構と遺物
1 イ区の遺構と遺物	1 概 要
2 ロ・ハ区の遺構と遺物	2 住居址
3 ニ区の遺構と遺物	3 遺構外の出土遺物
第4節 まとめ	第4節 まとめ

挿 図 目 次

第1図 西の入遺跡および周辺の遺跡	第13図 1号土坑
第2図 西の入遺跡周辺地形図	第14図 1号土坑出土遺物
第3図 イ地区全体図	第15図 1号溝
第4図 第3トレンチ平面図・断面図	第16図 1号溝出土遺物
第5図 イ区出土遺物(1)	第17図 ニ区出土遺物
第6図 イ区出土遺物(2)	第18図 篠八田遺跡および周辺の遺跡
第7図 イ区出土遺物(3)	第19図 篠八田遺跡周辺地形図
第8図 イ区出土遺物(4)	第20図 発掘区全体図
第9図 イ区出土遺物(5)	第21図 1号住居址
第10図 イ区出土遺物(6)	第22図 1号住居址出土遺物
第11図 ロ・ハ区出土遺物	第23図 遺構外出土遺物(1)
第12図 ニ区全体図	第24図 遺構外出土遺物(2)

第 1 章

西の入遺跡



第 1 図 西の入遺跡および周辺の遺跡(1/25,000)

- 1.西の入遺跡
- 2.若林第2遺跡
- 3.若林第1遺跡
- 4.若林第3遺跡
- 5.油川第3遺跡
- 6.石堂B遺跡
- 7.石堂A遺跡
- 8.野添遺跡
- 9.菅の神遺跡
- 10.古林第1遺跡
- 11.古林第2遺跡
- 12.古林第3遺跡
- 13.常盤A遺跡
- 14.天神、上の祖利遺跡
- 15.山の神、常盤遺跡
- 16.常盤B遺跡
- 17.上の原A遺跡
- 18.妻ノ神遺跡
- 19.上ノ原遺跡
- 20.水落遺跡
- 21.上ノ原B遺跡
- 22.大久保、ハツ牛遺跡
- 23.山の神遺跡
- 24.上ノ原C遺跡
- 25.和田(甲ッ原)遺跡
- 26.新井A遺跡
- 27.旭西久保A遺跡
- 28.旭東久保A遺跡
- 29.旭東久保B遺跡
- 30.旭東久保A遺跡
- 31.社口、古城跡遺跡
- 32.道満、細久保遺跡
- 33.旭山岩

第 1 節 調査に至る経過と組織

1 調査に至る経過

山梨県教育委員会では、昭和60年度から具体化してきた八ヶ岳広域農道建設計画に先立ち、昭和61年度から当該地域の遺跡分布調査を、昭和58年度から実施している八ヶ岳東南麓遺跡分布調査の継続事業として、文化庁の補助金を受けて実施してきた。これらの調査で、昭和61年度に7カ所、昭和63年度に4カ所、平成元年度に1カ所、平成2年度に5カ所、平成3年度に1カ所の試掘調査を行い、合計8カ所の遺跡が確認された。このうち、昭和62年度に須玉町西川遺跡、昭和63年度に高根町妻ノ神遺跡、平成元年度に中込遺跡、平成2年度に小坂遺跡の本調査を実施した。本遺跡は、平成2年度の試掘調査で確認された。調査面積は、1300㎡。調査費用は文化庁と農林水産省との覚え書きに基づいて算出し、平成3年度当初予算に計上した。本遺跡の調査経過は、下記の通りである。

平成3年5月15日 発掘通知を文化庁長官に提出
5月20日 発掘調査開始
7月31日 発掘調査終了
8月12日 埋蔵文化財の発見通知を長坂警察署に提出
10月1日 整理作業開始

2 調査組織

調査主体	山梨県教育委員会
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者	浅利司、保坂和博
発掘作業員	八巻久子、井富保仁、八巻知子、八巻栄、小宮山きよ、田中恒子、中島當子、堀内さだこ、小沢福子、日向一子、日向登茂子、藤森佐喜子、藤森さちこ、藤森さとみ、藤森八千代、八巻重子
整理作業員	斉藤律子、名取洋子、野中はるみ、望月和佳子、高野真寿美、保坂典子、伊藤順子、新掘裕美、石原はつ子、仲澤桂子、長田久江、広瀬悦子、平重蔵、平美与枝、宇野和子、長田和子、矢崎米子、中込よしみ、出月満寿江、長田くみ子、込山優子
協力機関	高根町教育委員会

第 2 節 遺跡の概要

1 遺跡の立地

西の入遺跡は八ヶ岳南麓の標高約840mの山梨県北巨摩郡高根町堤字西の入に所在する。この南麓一帯は火山特有のなだらかなスロープをなし、雄大な高原をくり広げており、牧畜や高原野菜の栽培のほか観光地として広く利用されている。また標高1000m付近に自然湧水地帯が

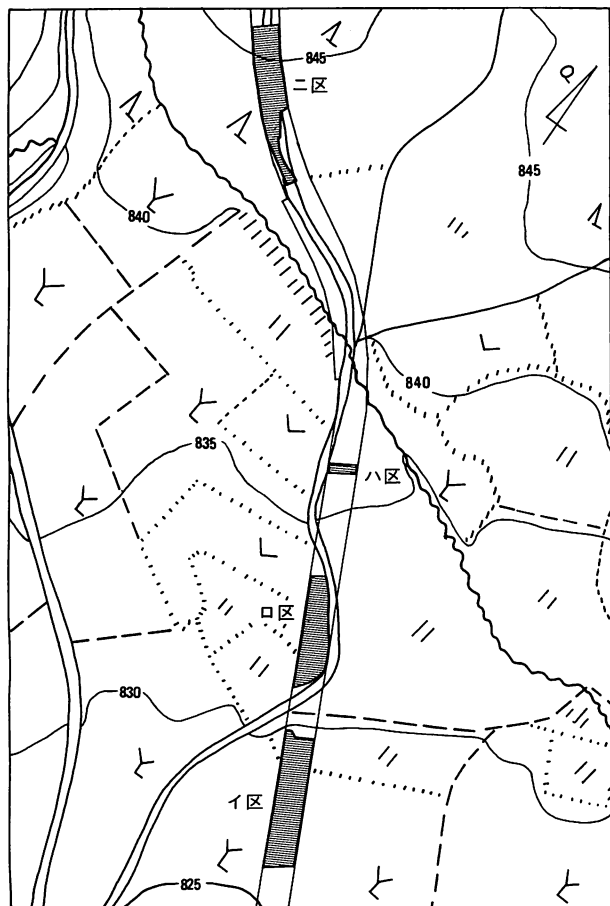
見られ、そこから幾つかの南下する河川によって開析された舌状台地が形成されており、台地と谷部との比高差は数メートルである。

本遺跡はこれらの河川の一つである川俣川の小支流によってつくられた河岸段丘上に存在している。この台地はかつては湧水によって形成された谷が南北に幾つか見られたと思われる。今回の調査により発掘区内の南側地点（イ区）のほぼ中央を南北に走る（発掘調査開始時点でも使われていた）水路は以前谷部であり、そこを利用して現在の水路がつけられたことが確認された。また台地のいたる所では、湧水地があり、本遺跡内においても数カ所見られた。遺跡の北東側には標高 950 m の堤山、東側には標高 911.5 m の旭山が位置し、これらは八ヶ岳南麓に数多く見られる八ヶ岳大噴火によってつくられた流れ山と思われる。「流れ山」は中世において、しばしば山城として利用されているが、旭山においても砦が見られる。

2 周辺の遺跡

本遺跡が立地する高根町は、八ヶ岳東南麓の山裾に広がる南北に長い町であり、町内の遺跡総数は、約 170 カ所を超える数となっている。

時代別にみると先土器時代 6 遺跡、縄文時代 106 遺跡（早期 7 遺跡、前期 7 遺跡、中期 62 遺跡、



第 2 図 西の入遺跡周辺地形図(1/2,500)

後期 20 遺跡、晩期 5 遺跡、時期不明 28 遺跡、ただし 1 遺跡が 2 時代以上にわたるものもある）、弥生時代 13 遺跡、古噴時代集落 10 遺跡（前期 6 遺跡、後期 4 遺跡）、古噴 11 基、奈良時代不明、平安時代 64 遺跡、中世～近世遺物散布地 80 遺跡である。縄文時代が突出し、中でも縄文時代中期の遺跡が多く見られ、次いで、平安時代の遺跡が多く見られる。このような傾向は、八ヶ岳南麓一帯にみられるものである。標高による遺跡分布では、先土器時代の遺跡は 1500 m の美し森周辺や、清里念場原という高冷地に多く、丘の公園遺跡群なども最近発見されている。それ以外の時期の遺跡は、標高 800 m 以下に集中しており、八ヶ岳山麓の湧水源が標高 800 m 付近に位置していることなどに原因があるのだろう。周辺の主な遺跡について概観すると、まず先土器時代の遺跡としては北東約 5.5 km、標高 1200 m

前後の高冷地にあり、ナイフ形石器や槍先形尖頭器等を出土した大規模な丘の公園遺跡群がある。これに続く縄文時代の遺跡としては南西約2kmに甲ツ原遺跡(25)がある。現在発掘中であるが中期を中心とする大集落を形成する遺跡と思われる、曾利式Ⅳ～Ⅴ期と思われる掘立柱建物址4棟が本県では初めて確認されている。また南東約8kmに後期中葉の石棺墓群が発見された青木遺跡や北西約1kmに後期初頭～晩期前半の配石群と石棺墓群が発見された大規模な石堂遺跡(6)がある。さらに東約3kmには、後期～晩期にかけての大規模な配石遺構を持つ集落遺跡である金生遺跡がある。遺跡内は、住居区・墓域・祭祀域・広場の各場に別れている。出土遺物には、数多くの土偶や土製耳飾りをはじめ、立石・石剣・石棒類が検出され、本遺跡の祭祀性の強さを特徴づける遺物が確認されている。平安時代の遺跡としては、金生遺跡のB地区において6軒の住居址、また10世紀～11世紀初頭に遺跡の中心がある寺所遺跡では住居址31軒、掘立柱建物址3棟が確認されている。

中世後半以降の遺跡としては、北西約3kmに甲斐源氏の祖といわれている逸見清光の居城と伝えられる谷戸城や、南西約500mの旭山山頂には、旭山砦(33)がある。

3 調査方法

西の入遺跡の発掘は、八ヶ岳広域農道建設事業に先立つ記録保存を目的とした調査である。調査対象地域は堤山の裾部に広がる緩やかな台地で、現状では主に農道および水田・桑畑として利用されており、調査対象面積は、1300㎡である。本遺跡は、平成2年度の試掘調査によって縄文時代中期後半の遺物が確認されている。発掘区の設定は第2図に示した通りであり、南側からイ・ロ・ハ・ニ区を設定した。発掘はイ・ロ・ニ・ハと順次行っていった。表土は原則として重機により除去し遺構確認面直上から人力で精査し遺構の確認に努めた。グリットは、調査範囲が南北に長い各地区ごとに、それぞれ4m四方のグリットを設定した(ハ区においては発掘区が狭いためハ区一括として取り上げた)。

イ区……イ区発掘区内のほぼ中央を南北に走る(発掘調査開始時点でも使われていた)水路があり、その水路の付け替えのために第1トレンチを設け、遺物・遺構の確認を行った後、仮設水路とした。また表土下90cmまで掘り下げたところで、現状で使用されていた水路(水路の西側一帯)にそって多数の流石及び多量の水が湧き出し、イ区全体の深掘が困難なために第2・3トレンチを設定し調査を行った。

第4トレンチについては、イ区発掘区東壁際に設定し遺物・遺構の確認を行った(第3図参照)。

ロ区……ロ区発掘区内中央部に湧水地点があり、多量の水が発掘区内に流れ込むため発掘区西際に水路を設定し調査を行った。

ハ区……試掘調査時において遺物・遺構が検出されていなかったが、7.5×10mの範囲で調査を行った。

ニ区……ハ区の北に続く部分では試掘調査時において遺物・遺構が検出されていなかったが第1・2トレンチを設定し、遺物・遺構の確認を行った。さらに北に続くニ区発掘

区内は、遺構確認面まで下げたところで数カ所に攪乱が見られたので第3トレンチを設定し遺構確認に努めた（第12図参照）。

遺物については遺構確認面に到達するまでは、各グリットごとに取り上げた。遺構内出土の遺物に関しては光波測量機および小型コンピューターを用いて取り上げ、これらのデータをもとに整理作業を行った。

4 基本層序

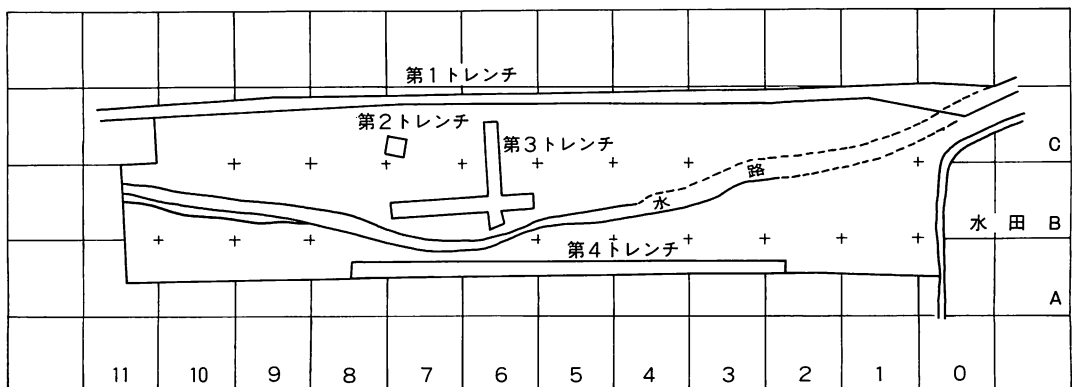
本遺跡は南北に長く各地区における層序が異なるため、それぞれの地区について述べることにする。

イ区は表土（耕作土）、暗茶褐色土、黒褐色土の層序となっている。本地区区において注目すべき層は、黒褐色土層である。本地区区には南北に走る谷部があり、そこへまず径80cm大の石が流れ込み、その後黒褐色土が堆積している。この黒褐色土の下部は多量の石が混入し、地山のローム面は確認できず、かなり厚く堆積していると思われる。またこの層に縄文時代中期の遺物の出土が見られる。

ロ区は南側半分においては、湧水地があり表土は沼地状態になっている。また表土の下層はローム面であるが、一部は平地にするためにローム面がカットされ粘質土が露呈し、またローム面が急激に傾斜する箇所には石が詰め込まれ、その上に床土を入れており、以前この地が水田として利用されていたことが窺われる。北側半分は、表土、黒色土、暗茶褐色土となっている。

ハ区は表土一層の単一層であり非常に浅く、桑の根による攪乱が厳しい。

ニ区は表土、明褐色土、黒褐色土、暗茶褐色土と比較的安定した層序となっており、黒褐色土より下層において縄文時代中期の遺物が検出された。



第3図 イ区全体図

第3節 遺構と遺物

1 イ区の遺構と遺物

遺構（第3図）

イ区は本遺跡発掘区対象地の南端部に位置する。標高は830mを数え、緩やかに南に傾く斜面であり、調査開始以前は桑畑として利用されていた。

本調査区の中央部には南北に走る石積みの水路があったが、この水路を付け替えるために発掘区西壁際にトレンチを兼ねた仮水路を設け調査を行った。調査の結果、遺構は確認されなかった。

なお、石積みの水路の西側には水路に添う形で地山のローム面上に谷部が検出された。この谷部には径80cm大の石が多量に流れ込んでおり、このため谷部の底面は確認できなかった。またこれらの石

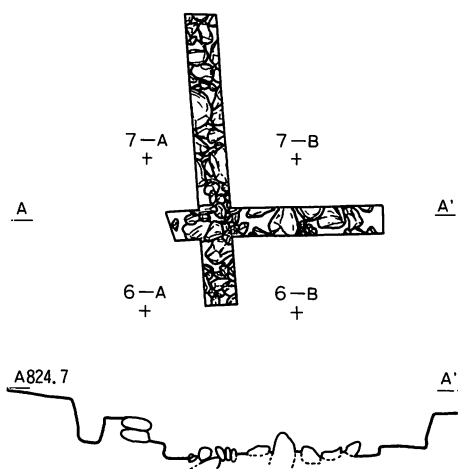
と共に黒色土が流れ込んでおり、遺物はこの黒色土中より検出された。

遺物

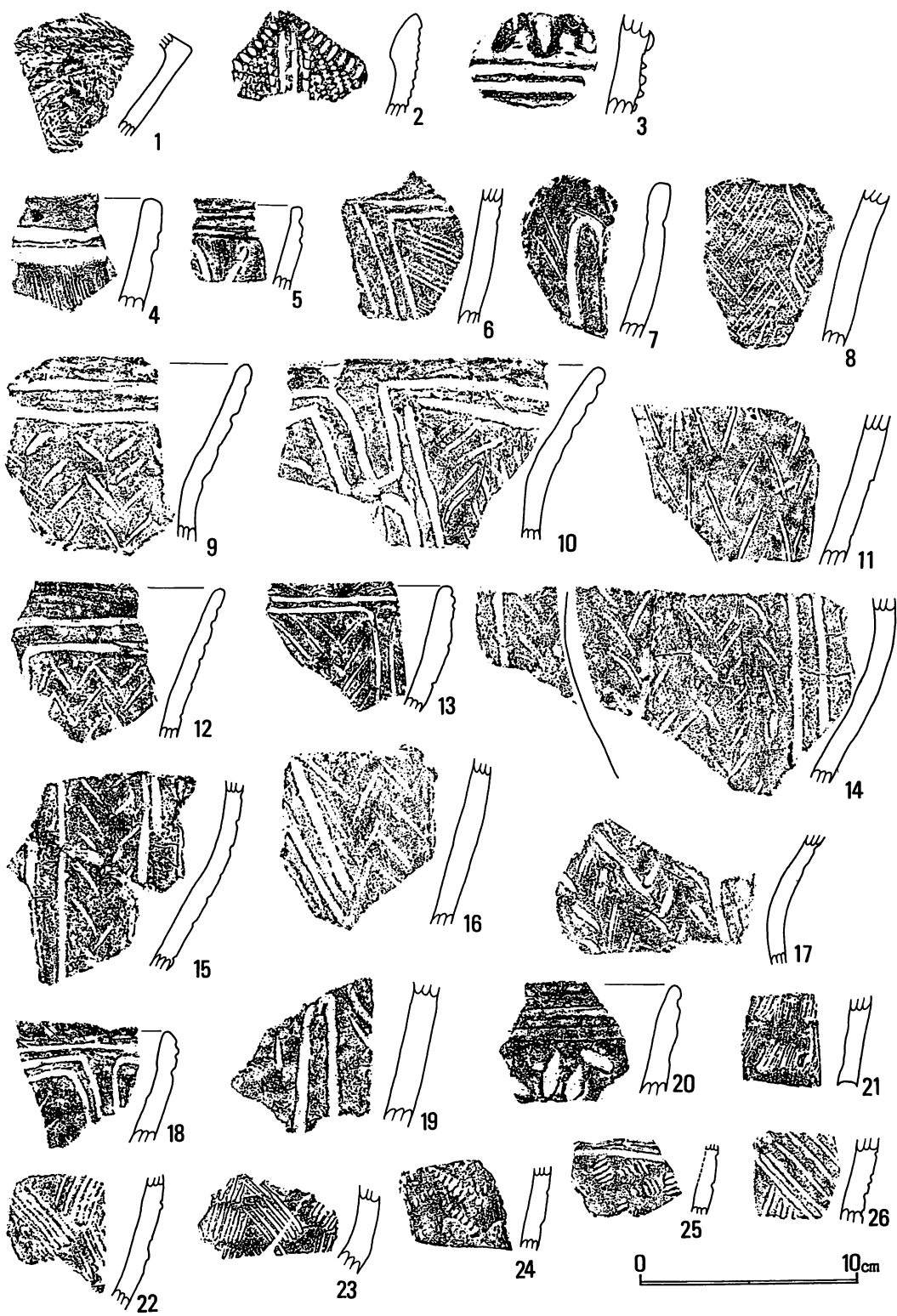
a 土器（第5図～第8図）

イ区からは遺構は検出されなかったが、4-Cグリッド～8-Cグリッドを中心とする黒色土中より多数の土器の出土を見た。その95%は縄文時代中期後半の曾利式期、しかもその後半に属するものである。

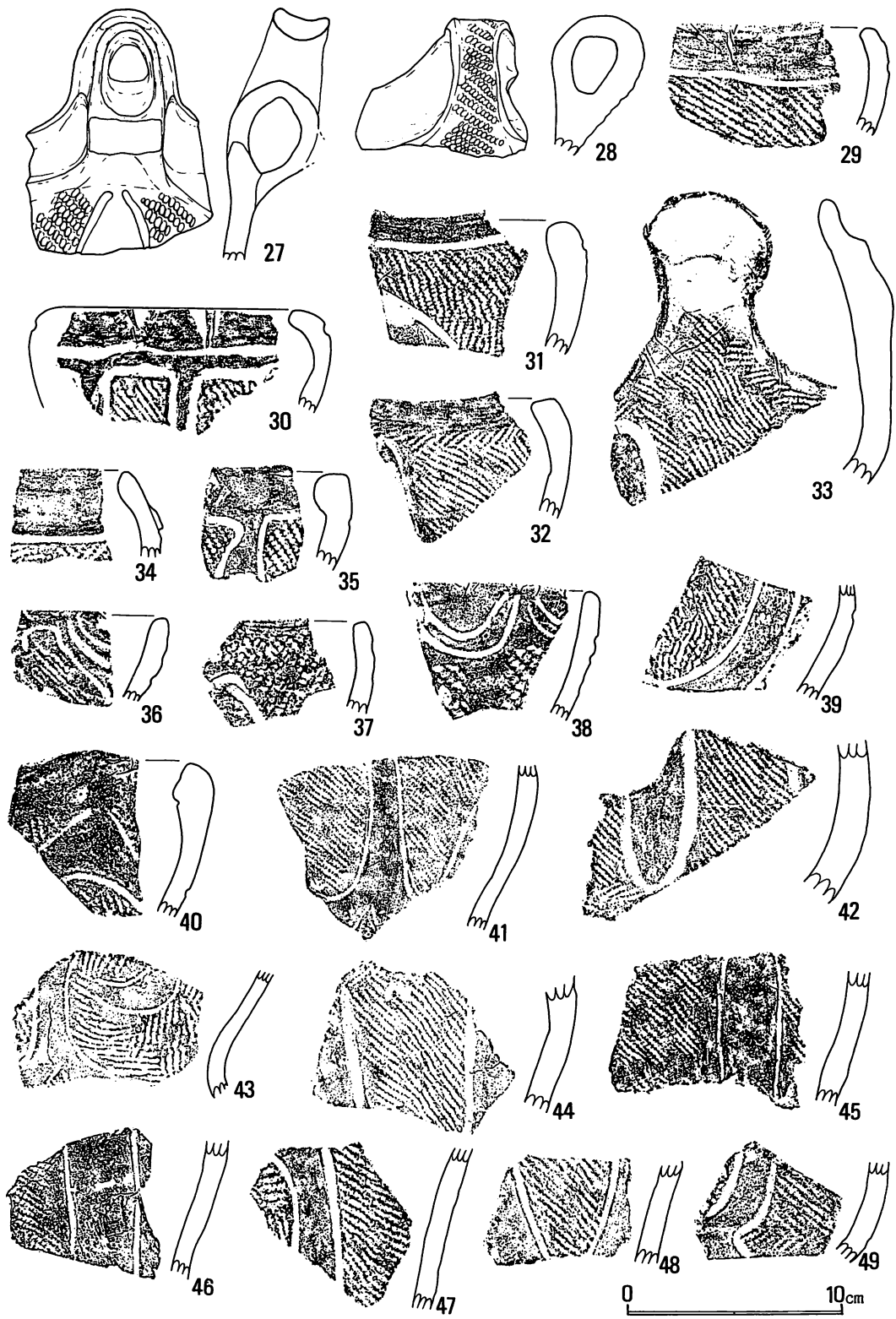
1は諸磯C式土器の破片である。谷部の黒色土中ではなく、ロームの直上から出土した。2は五領ガ台式期の土器片である。内面が肥厚する波状口縁の一部である。3は曾利I式に属すると思われる。1～3は何れも1片ずつしか出土していない。4～81は曾利式後半期の土器である。4～8は沈線により器面を区画し、この中を綾杉状の集合沈線で充填している。この充填が、ペン先状工具や棒状工具による連続「ハ」の字文になったものが9～19である。21～25は櫛歯状の工具を器面に押し付けたり、その後引きずって施文している。これらの土器は口縁部文様帯がほとんど省略されている。器形は胴部中央がやや膨らみ、ゆるやかに開く口縁のものが多く、つくりは全体的に雑な感じを受ける。27～52は沈線による区画の中を、縄文で満たしているものである。これらの区画は縦方向を基本としながら、胴部中央のゆるやかに屈曲する部分で上下に分かれるものが多い。口縁部文様帯は省略されることが多く、大きめの把手をもつものもある（27・28・33）。52・53は低い隆帯の上に縄文を施している。55～64は断面三角形の細い隆帯で器面を区画するもので、やはり縄文を充填する。66～71は沈線のみにより文



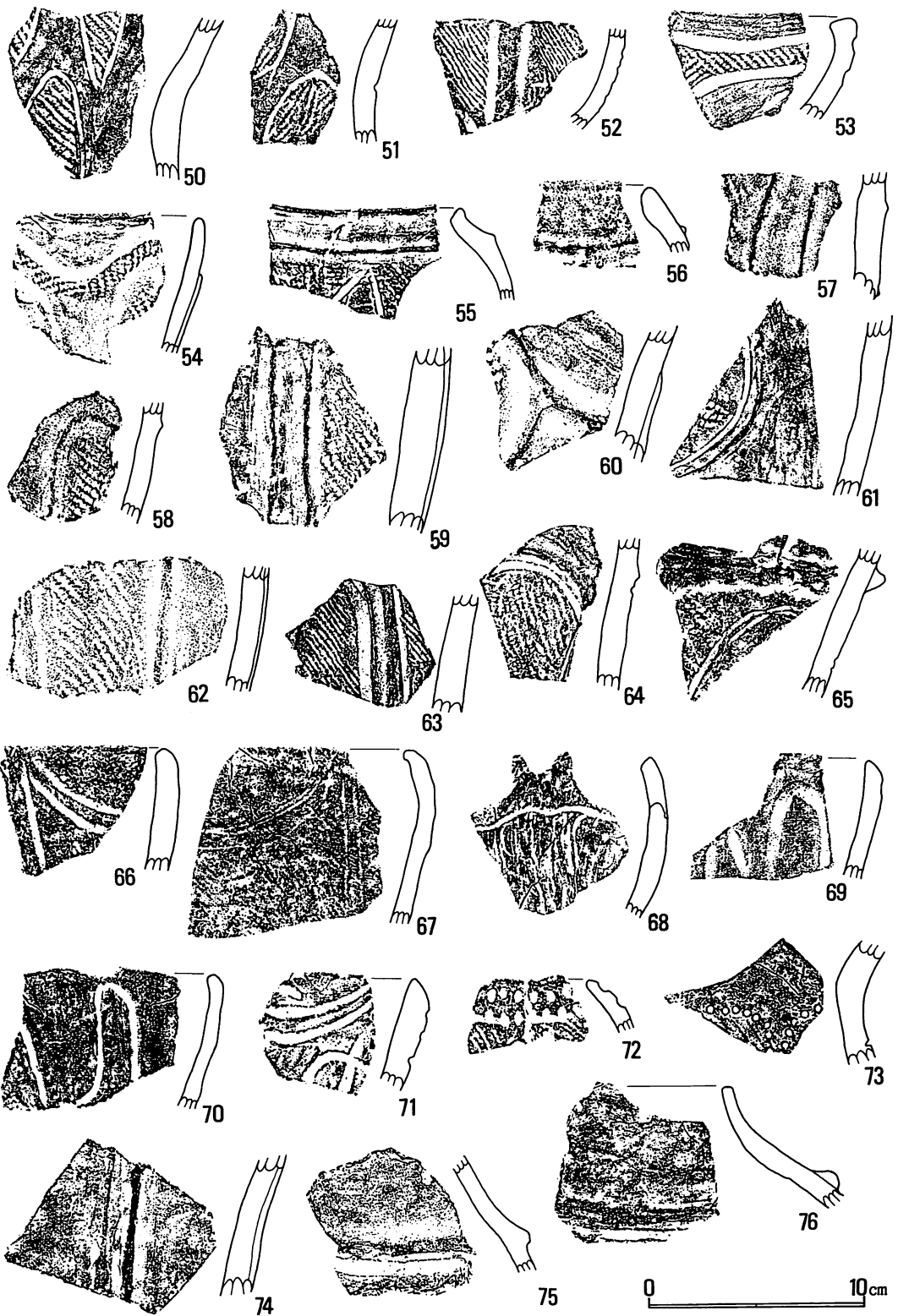
第4図 第3トレンチ平面図・断面図



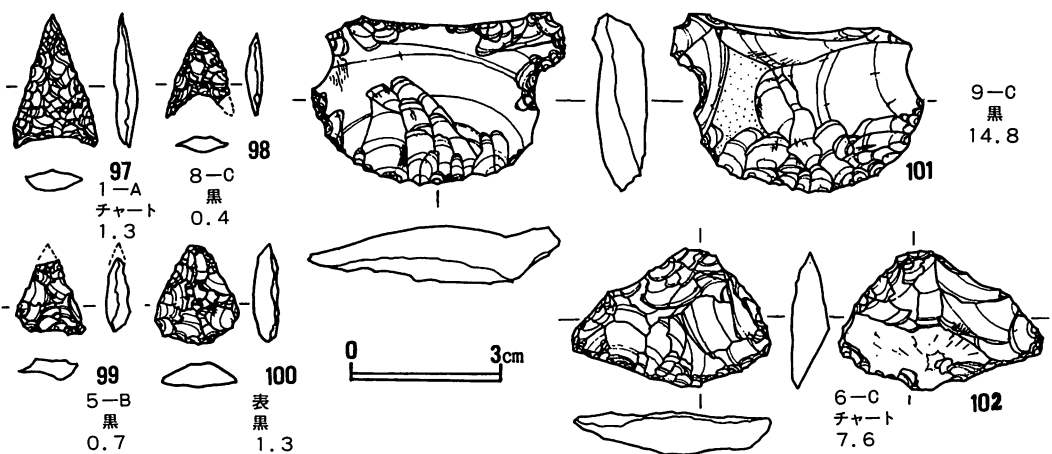
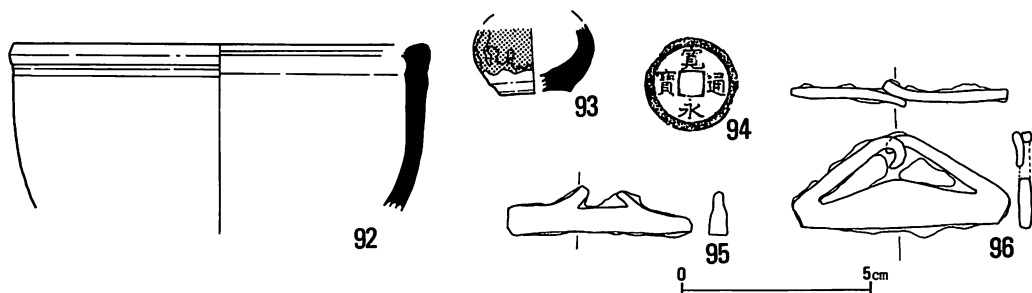
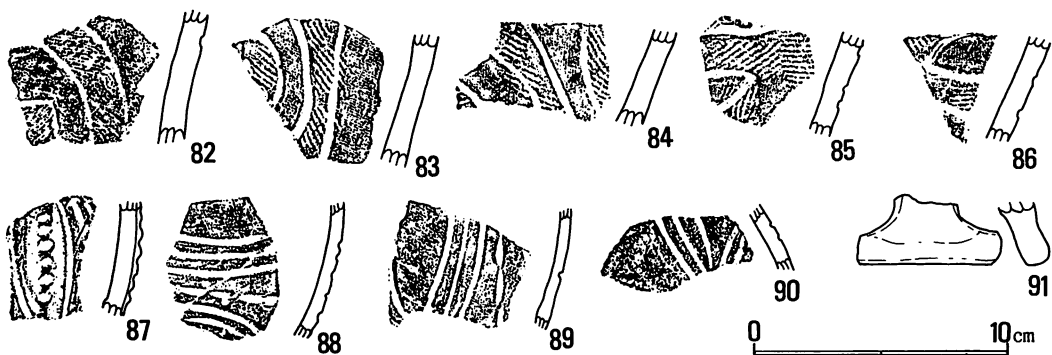
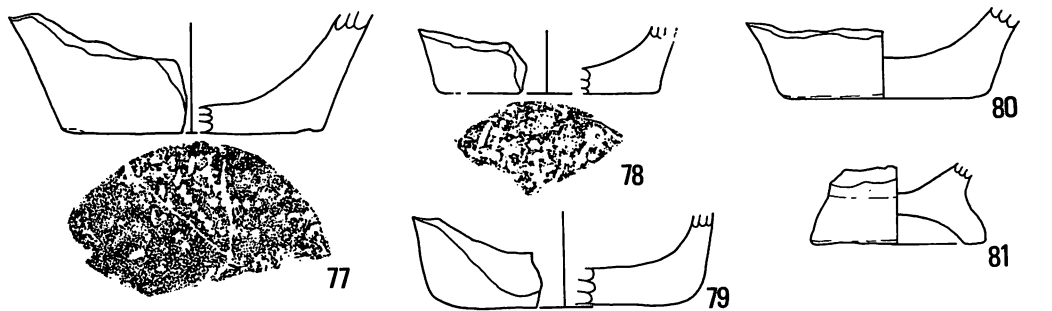
第 5 图 1区出土遗物 (1)



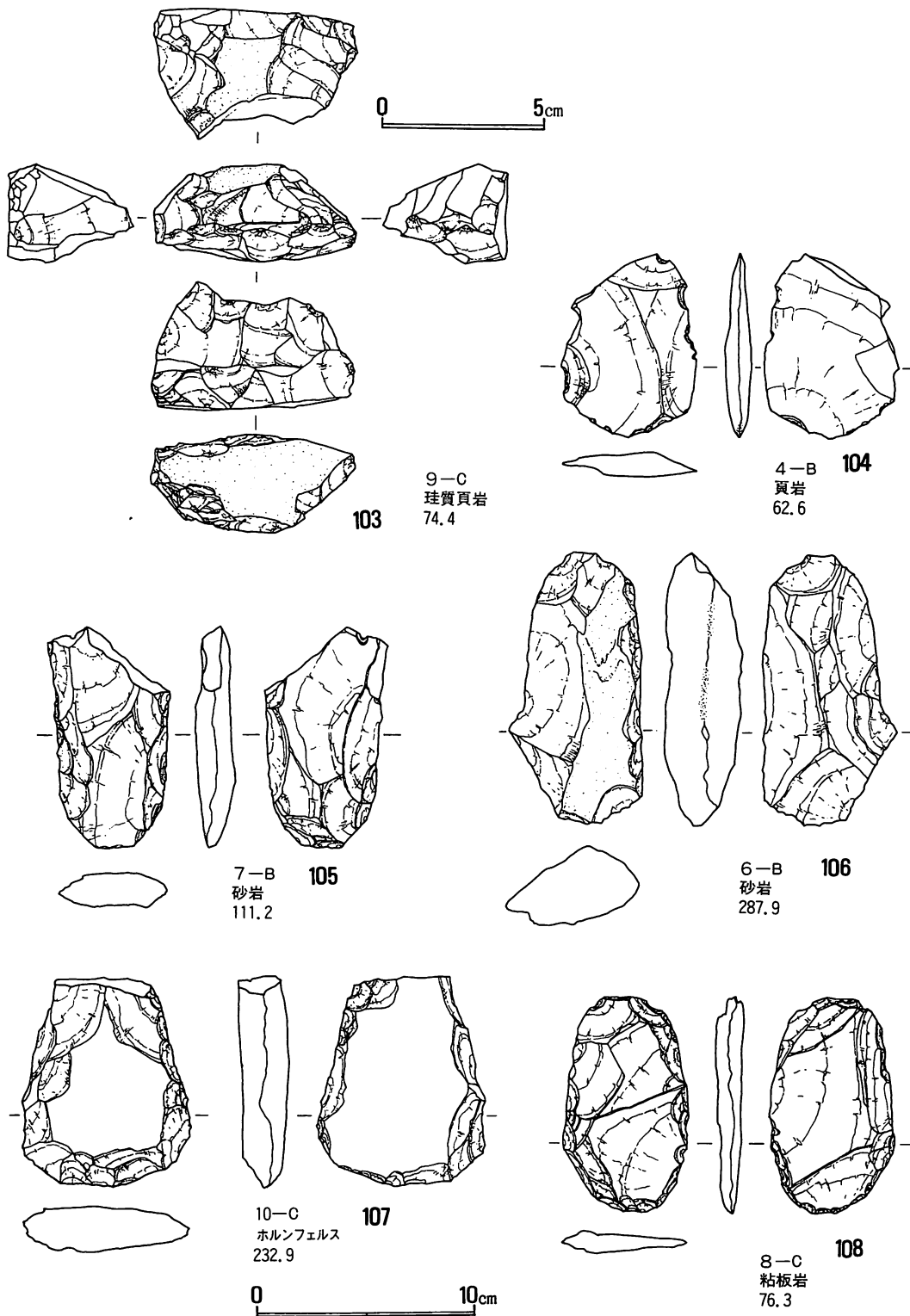
第 6 图 Ⅰ区出土遗物 (2)



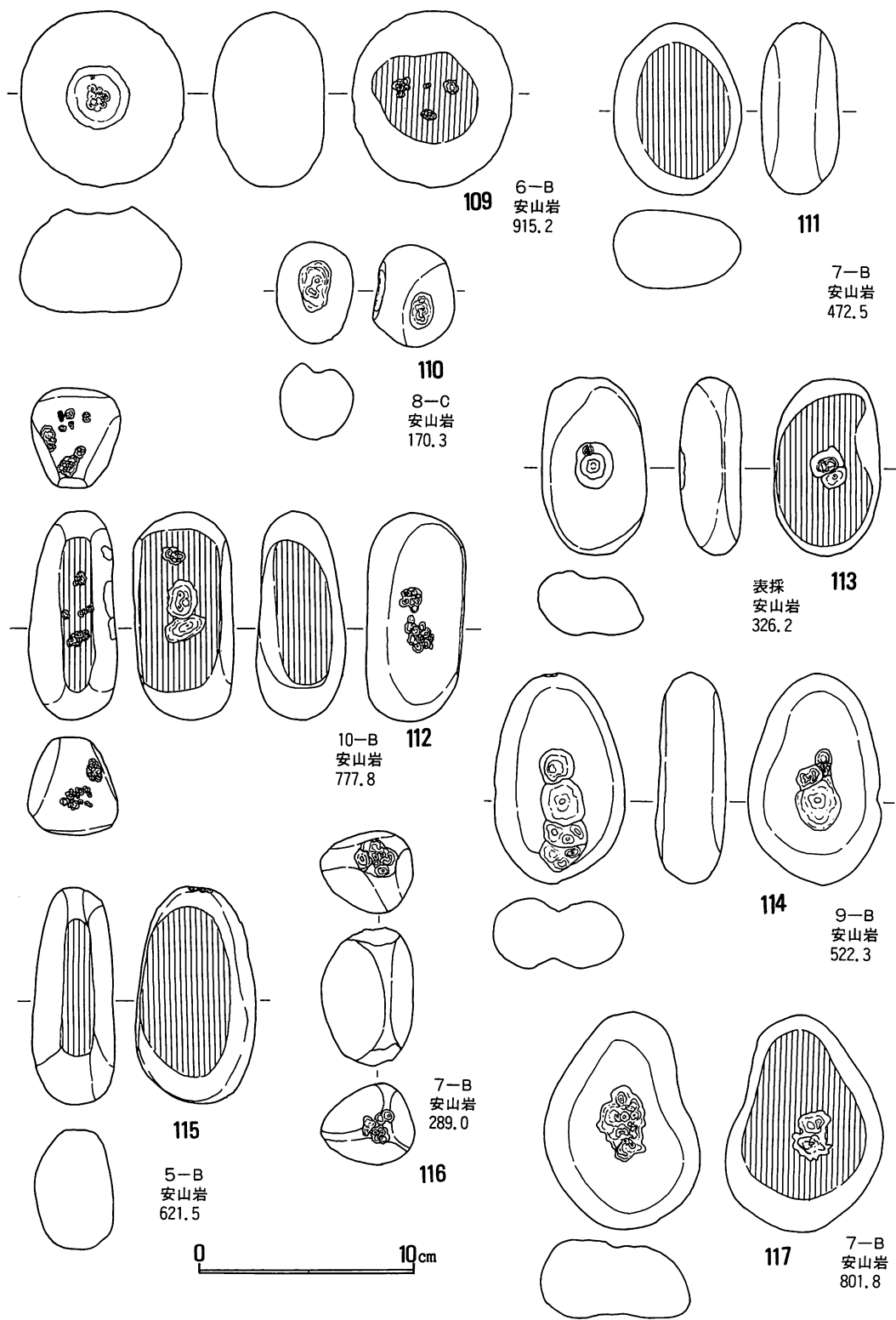
第 7 图 イ区出土遺物 (3)



第 8 図 イ区出土遺物 (4)



第 9 図 Ⅰ区出土遺物 (5)



第 10 图 Ⅰ区出土遗物 (6)

様の描かれているものである。75・76は同一個体と思われ、胴部が球形に膨らむ器形の土器である。27以降の土器は上記の開く器形と異なり、口縁部がやや内湾するものが多いようである。以上の土器は、中期末の曾利Ⅳ～Ⅴ式に比定されよう。82～90の土器は後期初頭～前半に属すると思われるものである。82～86は縄文を施した後沈線で文様を描き、一部の縄文を丁寧な磨り消している。一部は中期最終末に属する可能性もある。87～90は黒色で器壁が薄く、内外面とも良く磨かれている。いずれの土器もつくりが丁寧で、焼成も良好で堅緻である。91は円形の窓を数箇所持つ台形の土製品である。所属時期は明確でない。

b 石器（第8図～第10図）

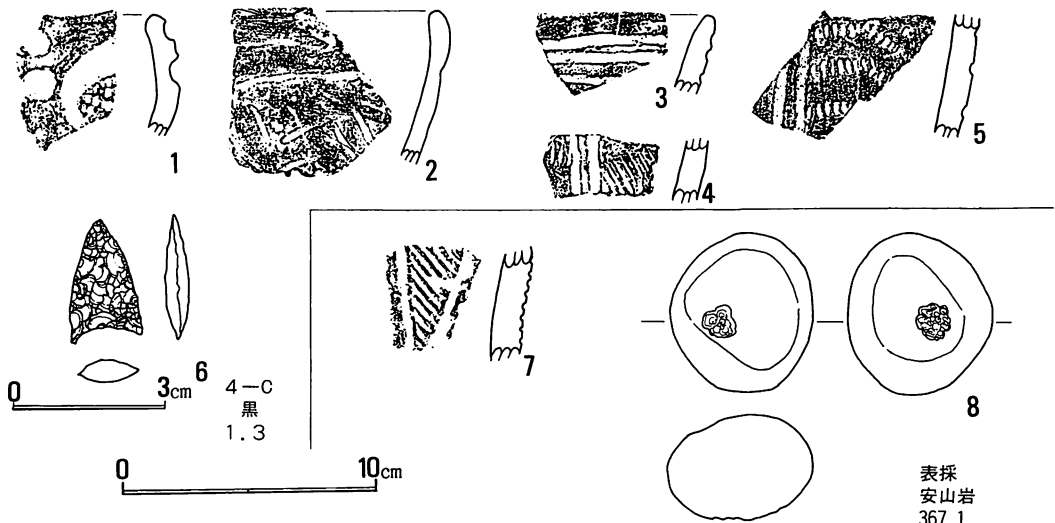
Ⅰ区出土の石器は図に示したもので全てである。このほかに黒曜石などの小剥片が出土しているが、使用痕の見られるものはなかった。101・102は石匙の未製品と思われる。103は石核状の石器で、断面は船底形を呈する。剥離が鋸歯状になされている。同様の石器は須玉町の郷蔵地遺跡（1987 山梨県教育委員会）からも出土しており、所属時期も同じであることから、今後注意を払って行く必要があるようである。104～108は打製石斧、109～117は磨り石・凹石である。打製石斧は108以外は欠損品である。116は所謂「特殊磨り石」である。

c その他の遺物（第8図 92～96）

92～96は近世の遺物である。92は黄瀬戸の碗、93は鉄釉がかかった小壺である。いずれも18世紀頃の所産と思われる。95・96は火打ち金である。

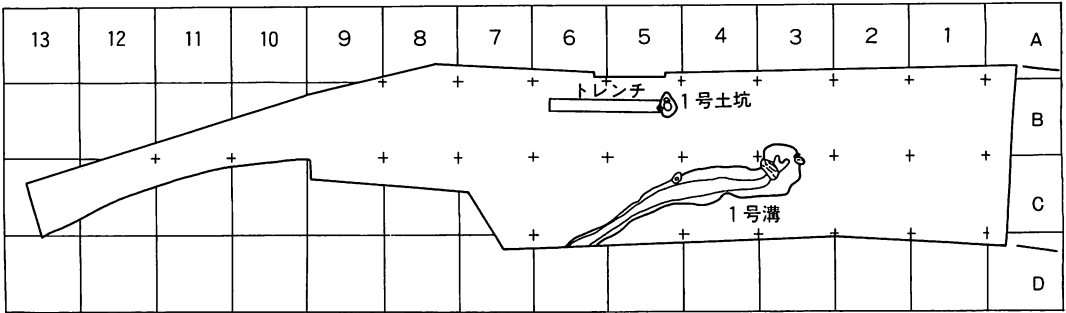
2 Ⅰ区・Ⅱ区の遺構と遺物

Ⅰ区・Ⅱ区からは遺構は検出されなかった。Ⅰ区よりも数m高い低尾根上で、いずれも下層にロームを残していたがこれ以降の堆積が薄い。出土した遺物は第11図に示した。Ⅱ区の7(中期中葉)を除いてⅠ区と同時期のものである。8は表採品である。

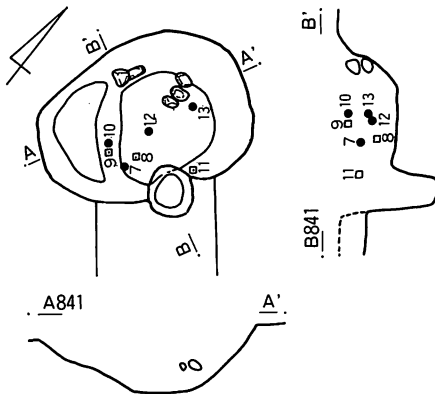


第 11 図 Ⅰ区・Ⅱ区出土遺物

3 ニ区の遺構と遺物



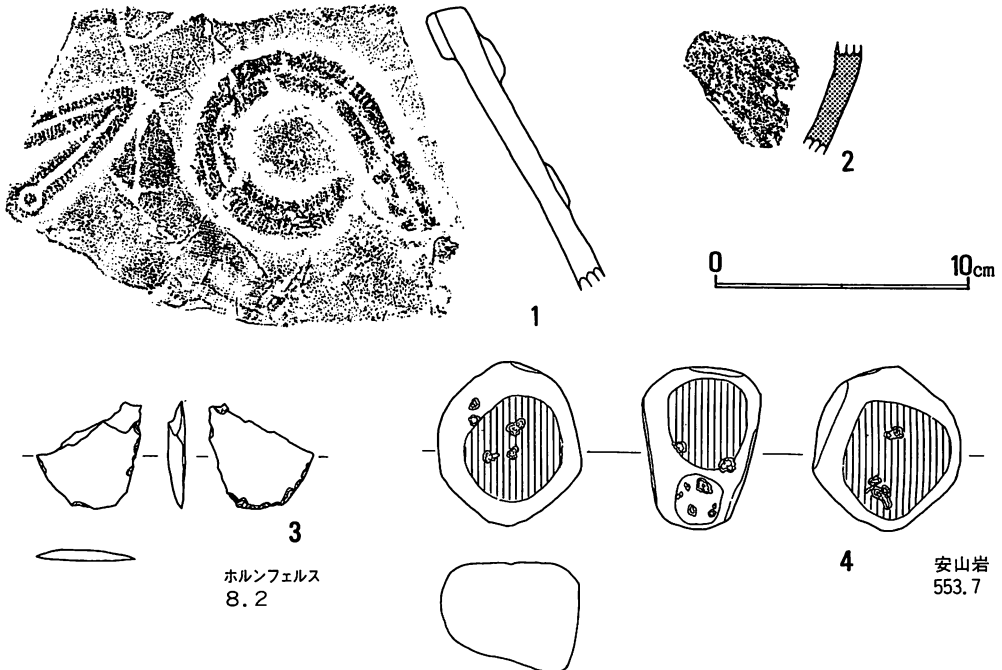
第 12 図 ニ区全体図



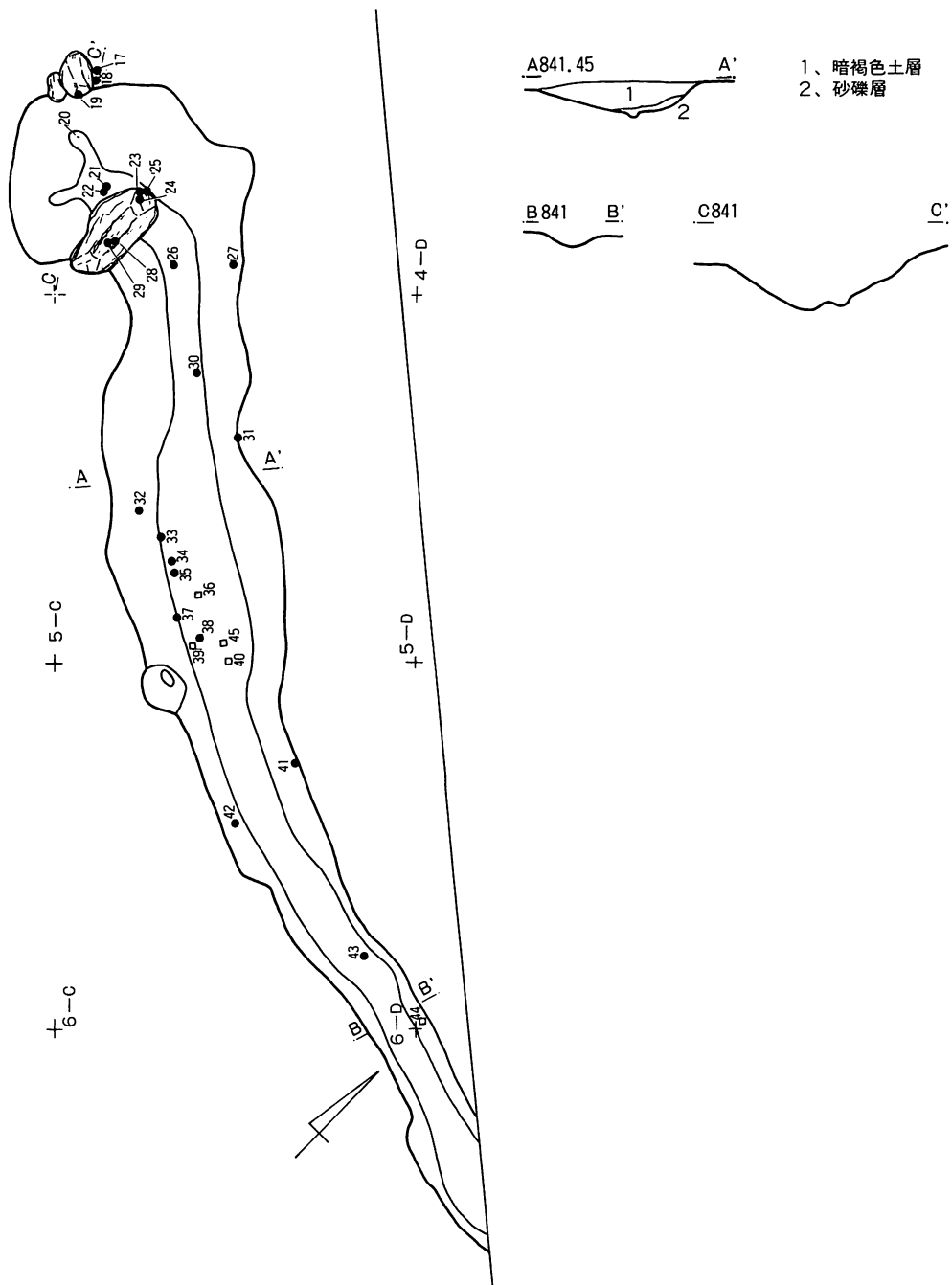
第 13 図 1号土坑

ニ区はロ・ハ区から北西へ130 m程のところ
に設定した区で、堤山の麓の傾斜変換点にあたる。
南西向きで、I区からは20 m近く標高が高
い。調査の結果、縄文時代中期の土坑1基と時期
不明の溝状遺構1条が検出された。部分的に攪乱
の著しいところがあった。

< 1号土坑 >
遺 構 (第13図)



第 14 図 1号土坑出土遺物

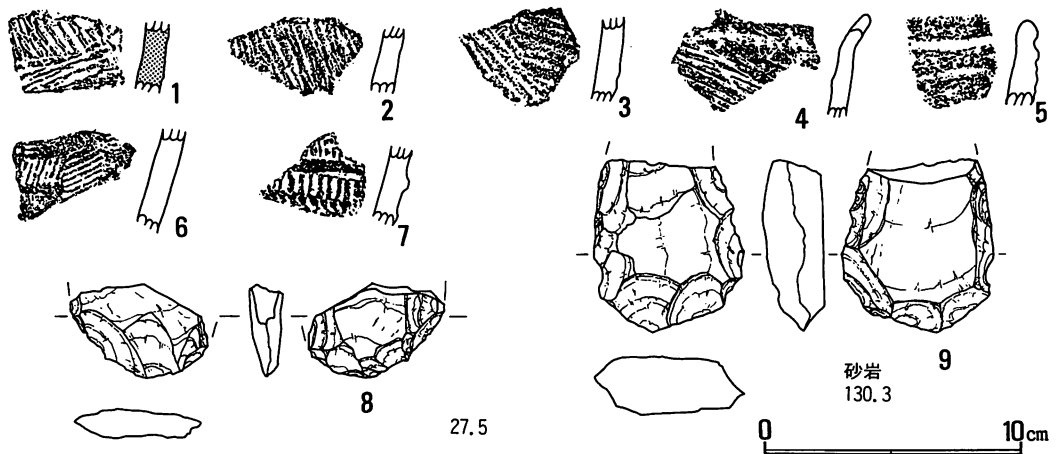


第 15 図 1 号 溝

長径 1.15 m、短径 0.8 m ほどの不整形の土坑で、東側の壁際にピット状の掘り込みがある。西側の立ち上がりは一部攪乱されていた。深さはピット部分で 0.55 m、底の部分で 0.3 m である。遺物から中期中葉の、墓墳的性格の強い遺構と推定される。

遺物 (第14図)

遺物は合計 7 点出土した。そのうち石器および石片は 3 点である。土器は胎土に繊維を含む



第 16 図 1号溝出土遺物

2 以外は、中期中葉の土器であった。1 は、抽象的な文様を隆帯で描き、これに沈線を加えて二本の平行する隆帯に見せている。器形は樽形になる。土坑の中央やや南よりから浮いた状態で出土した。3 は打製石斧の一部である。4 は3面に磨り面をもつ磨り石で、1の土器の直下から出土した。

< 1号溝 >

遺 構 (第15図)

発掘区の東西方向に溝が検出された。東側は発掘区外へ伸びている。西側は深く幅も広いが、東へ行くほど浅く幅も狭い。最も西の部分はとくに深く、一人では動かせない大きさの石が入り込んでいた。一部の底から砂礫が検出されており、自然の流路と思われる。

遺 物 (第16図)

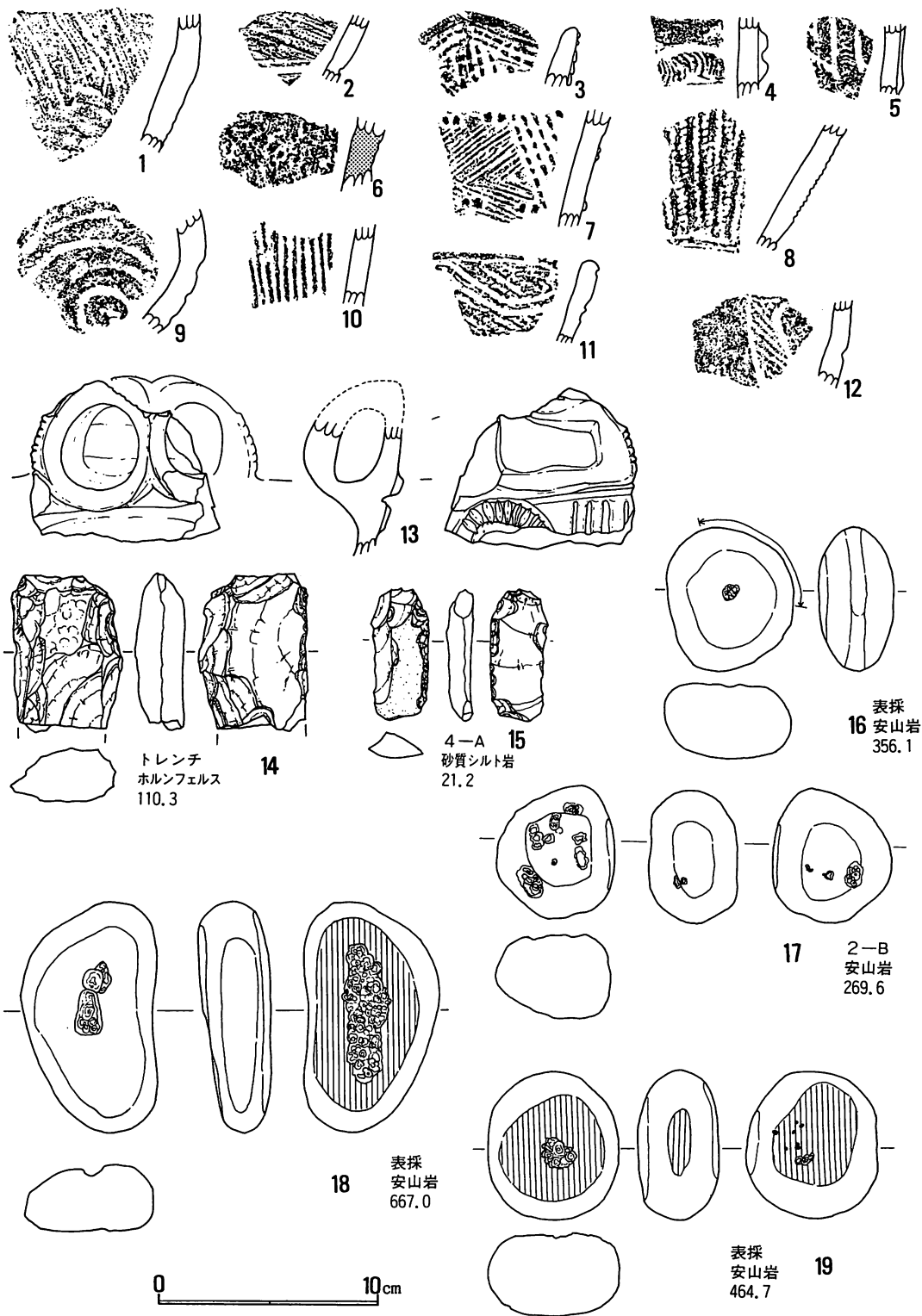
合計30点ほどの遺物が出土した。しかし、土器はいずれも小片で所属時期の不明なものも多い。文様の判別できるものを掲載した。1は胎土に繊維を含む。石器は2点出土し、8・9の打製石斧のみである。

< 遺構外出土の遺物 > (第17図)

ニ区は全体的に遺物の出土は少なかった。すべて縄文時代の遺物である。

土器は縄文時代早期末～縄文時代後期までバラエティーに富んでいる。1・2は表面に細かい条痕がみられる。緻密な胎土で焼きも良い。所属時期は明確には分らない。6は繊維を含む脆弱な土器である。早期末のものであろう。3・7は前期末のものである。両方ともに表採品であり、発掘区表面に客土があったことから、これに伴う遺物であるかもしれない。4・5・8・9・10・13は中期中葉の所産である。12は磨り消し縄文で後期初頭のものであろう。

石器は図に示したもので全てである。15は一辺に細かい剥離が入っている。スクレイパー様の石器である。19は磨り石であるが、一部に赤色のものが付着していた(図中の黒点部)。



第 17 図 二区出土遺物

第4節 まとめ

本遺跡は平成2年度の試掘調査で縄文時代中期後半の曾利式期の土器片が確認され、今回の発掘調査において、当期の遺構が予測されたが発見された遺構はすでに述べてきたとおりであり、土坑1基および溝1条のみである。遺物は縄文時代早期末から後期前半に至るものが出土している。

土坑はニ区内の5-Bグリットより確認され、伴出遺物より時期は縄文時代中期と思われる。土坑の検出状況をまとめると以下ようになる。

平面形態は不製円形を呈し、東壁際にピット状の掘り込みがあり深さはピット部で0.55 m、底の部分で0.3 mを測る。土坑内には中央やや南よりに縄文時代中期中葉の土器片が底面より浮上して検出され、また拳大の石が西壁および北壁際にそれぞれ2個ずつ底面よりもやや浮いた状態で散在的に見られた。さらに、土坑中央部において土器片・打製石斧・磨り石等の石器類がまとまって検出された。これらの状況より機能を断定することは困難と思われるが、土坑の周辺部において住居址等の他の遺構が検出されず、また土壙墓に関する考察として「勝坂期では住居址群に囲まれるような配置で土壙群が併存するが、曾利期に入ると住居址と土壙が分離する傾向が見られ、顕著な場合は完全に分離して土壙群は墓域を形成する場合も認められた」という見解も示されており、本土坑の性格の一端を示唆するものと思われる。

溝状遺構はニ区内3~6-Cグリット内において検出され、東側が発掘区外に伸びているため全形はつかめない状態である。一部の底より砂礫が検出され自然流路と思われるが、溝の西側と東側の平面形及び断面形態の違い等に人為的に構築された可能性が窺われる。本溝状遺構の時期は伴出遺物がいずれも小片で時期不明なものが多いためつかむことができない。

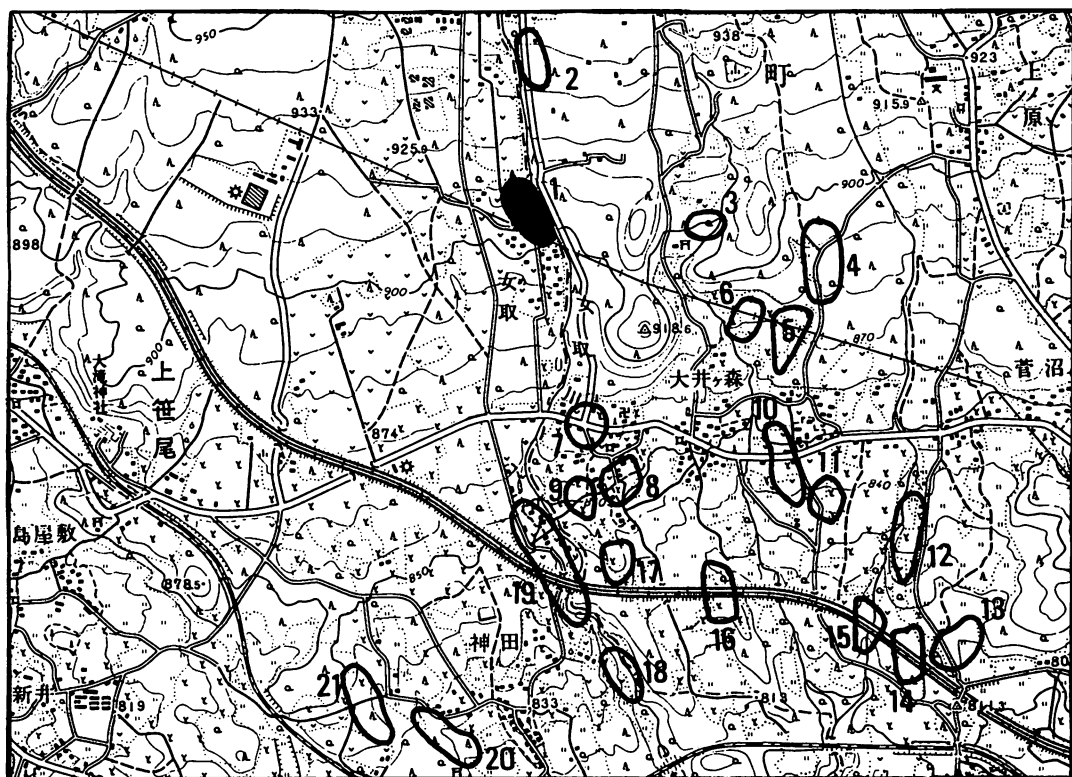
遺構外の遺物に関しては全体的に出土量は少なく、イ・ロ・ハ区からは中期末の曾利IV~V式と思われる土器片が主体を占め、後期初頭~前半の物が少量出土し、ニ区からは早期末から後期前半に至る各時期の土器片が少量出土している。調査区によって若干時期的な様相の違いが見られる。

また、今回の調査の一つの注目すべき点として、イ区に検出された谷部があげられる。八ヶ岳南麓には先土器時代より多くの遺跡が存在し、その数は縄文時代に入り急激に増加の傾向を示し、特に中期にピークに達し、後・晩期になると遺跡数が減少する事が窺え、本遺跡の所在する高根町内においても中期が70以上、後・晩期が合わせて25遺跡と同様な傾向が見られる。この要因の一つとして、このイ区内において確認された深い谷部を形成するような自然災害が考えられないであろうか。このローム面を深くカットして形成された谷部からは縄文時代中期の遺物がまとまって出土しており、当時期を境とする遺跡の減少傾向の一端を示唆しているように思われる。今後調査が行われていく中でこのような自然環境と遺跡との関わりが集落構成を考える一つの視点として重要であることは言うまでもないことである。

以上、今回の調査においては検出された遺構が少なく遺跡の性格等ははっきりつかむことはできなかった。しかしイ区内より検出された谷部からは多量の遺物が出土しており、本遺跡周辺の遺構の存在が窺われ、今後の調査に期待するところである。

第 2 章

篠八田遺跡



第 18 図 篠八田遺跡および周辺の遺跡(1/25,000)

- 1.篠八田遺跡
- 2.手白尾遺跡
- 3.中込遺跡
- 4.夫婦石遺跡
- 5.横山2遺跡
- 6.横山1遺跡
- 7.上フノリ平北遺跡
- 8.上フノリ平遺跡
- 9.上フノリ平西遺跡
- 10.横山平遺跡
- 11.葛原北遺跡
- 12.東下屋敷遺跡
- 13.新田森遺跡
- 14.西下屋敷遺跡
- 15.葛原遺跡
- 16.下フノリ平遺跡
- 17.下フノリ平南遺跡
- 18.神田遺跡
- 19.小野遺跡
- 20.柳沢北遺跡
- 21.西三蔵主遺跡

第1節 調査に至る経過と組織

1 調査に至る経過

山梨県教育委員会では、昭和60年度から具体化してきた八ヶ岳広域農道建設計画に先立ち、昭和61年度から当該地域の遺跡分布調査を、昭和58年度から実施している八ヶ岳東南麓遺跡分布調査の継続事業として、文化庁の補助金を受けて実施してきた。これらの調査で、合計8カ所の遺跡が確認された。本遺跡は、平成3年度の試掘調査で確認された。調査面積は360㎡。調査費用は、文化庁と農林水産省との覚え書きに基づいて算出し、平成3年度当初予算に計上した。本遺跡の調査経過は、下記の通りである。

平成3年7月31日 発掘通知を文化庁長官に提出
8月5日 発掘調査開始
9月30日 発掘調査終了
10月11日 埋蔵文化財の発見通知を長坂警察署に提出
10月1日 整理作業開始

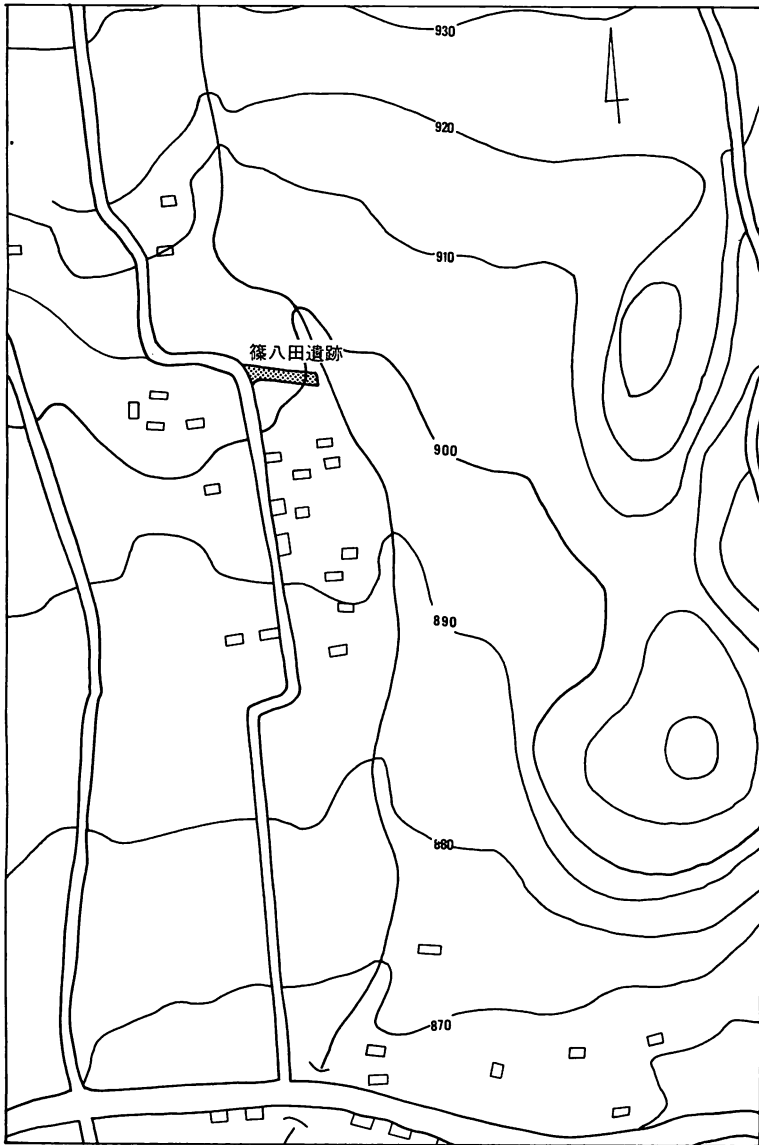
2 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会
調査機関 山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者 浅利司、保坂和博
作業員 八巻久子、井富保仁、八巻知子、小宮山きよ、八巻重子、清水さと代、清水里美、板山はつ子、板山梅子、内堀つる子、小松典子、堀内光子、平島けさの、三井ちか代、坂井ふじ
整理作業員 齊藤律子、名取洋子、野中はるみ、望月和佳子、高野真寿美、保坂典子、伊藤順子、新堀裕美、石原はつ子、仲澤桂子、長田久江、広瀬悦子、平重蔵、平美与枝、宇野和子、長田和子、矢崎米子、中込よしみ、出月満寿江、長田くみ子、込山優子
協力機関 小淵沢町教育委員会

第2節 遺跡の概要

1 遺跡の立地

篠八田遺跡は山梨県北巨摩郡小淵沢町上笹尾に所在する。小淵沢町は、山梨県の北部に位置し長野県との境界を持つ、八ヶ岳南麓に広がる高原地域である。本遺跡の立地する篠八田も標高900mを数え、甲府盆地との比高差が強く感じられる地域である。最近では、この小淵沢高原においてもリゾート開発が活発に行われてきており、篠八田も例外ではなく遺跡周辺にも数多くの別荘が目につくようになってきている。また一方で八ヶ岳南麓一帯は縄文時代をはじめ



第 19 図 篠八田遺跡周辺地形図(1/3,000)

とする長い年月に亙る遺跡が数多くあることでも知られている地域である。

この八ヶ岳南麓一帯は緩やかな地形が形成されているが、これは20～30万年前の八ヶ岳大噴火により発生したといわれる韭崎岩屑流が基盤となり形成されているものである。また標高1000m付近に自然湧水地帯が数多く見られ、そこから幾つかの南下する河川によって開析された舌状台地が、この八ヶ岳南麓一帯には形成されている。

篠八田遺跡は、この小河川のひとつである女取川によって開析された河岸段丘上に立地している。この女取川は編笠山南方海拔1200mの女取湧水より源を発し、長坂町から小淵沢町篠八田等を経て深沢川・大深沢川となり本流釜無川に注いでいる。

発掘区内は全体的に緩や

かに南に傾く平坦面をなしているが女取川と接する遺跡の東側は河岸段丘が形成され、きつい傾きを持つ斜面が幅20mほどの範囲に見られ、以前の女取川の流路が現在よりも西側にあったことがわかる（今回の調査においても発掘区東端部に女取川の岸線の落ち込みが確認され、現在よりもかなり西側を流れていたことがわかる）。遺跡面と女取川との比高差は約5mを測る。

2 周辺の遺跡

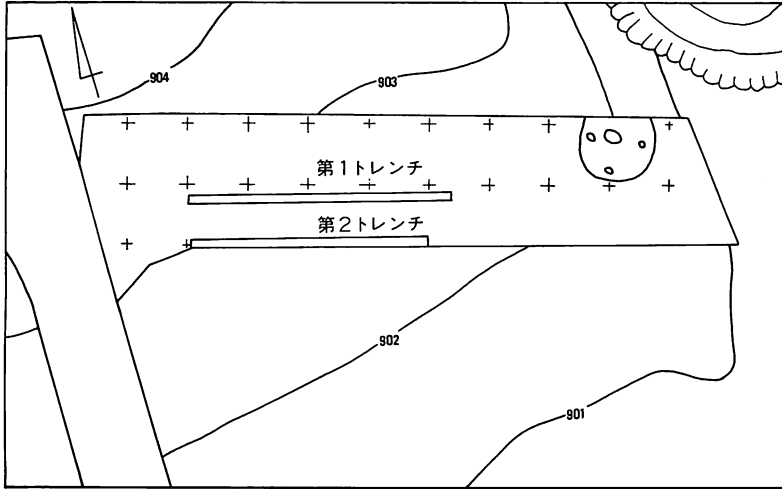
篠八田遺跡の位置する小淵沢町は八ヶ岳南麓の標高1000mという高冷地にあり、この八ヶ岳南麓一帯は縄文時代の遺跡が数多く発見され「遺跡の宝庫」として知られている。また、この南麓では標高1000m付近に自然湧水地帯が見られ、そこから幾つかの南下する河川によって開析された舌状台地が形成されており、この台地の尾根部や緩やかな南斜面、微高地上に遺跡は立地している。遺跡の分布状況は標高750mから950mの間に分布する。

小淵沢町内の遺跡総数は67遺跡である（昭和53年『小淵沢町の原始古代遺跡一分布調査報告書』による）。時代別にみると先土器時代不明、縄文時代60遺跡（早期1遺跡、前期19遺跡、中期54遺跡、後期10遺跡、晩期2遺跡、ただし1遺跡が2時代以上にわたるものもある）、弥生時代17遺跡、古墳時代1遺跡、奈良時代不明、平安時代26遺跡である。小淵沢町においては先土器時代の遺跡の発掘調査はこれまでに行われていないが、いくつかの遺物は発見されており、また長野県原村や山梨県高根町丘の公園遺跡群をはじめとする野辺山周辺で多くの遺跡が確認されているので、今後先土器時代の遺跡も発見されると思われる。縄文時代の遺跡としては、本邦最古となる草創期の爪形文土器をはじめ早期末の絡条体圧痕文土器等が出土した東1kmの中込遺跡がある。また、前期後半から後期前半にかけては遺跡数が急増しており、これは前期からの温暖化が動物・植物の増加を促し、縄文人の食生活を充実させたことに起因しているのであろう。この時期の遺跡としては北西3.5kmの中原遺跡などがあり、10軒の住居址等が検出されている。後期～晩期にかけては八ヶ岳南麓一帯においては極端に遺跡数が減少化する時期である。小淵沢町内では北西2kmの上平出遺跡から後期の敷石住居址が1軒発見されているが、一方で大泉村全生遺跡の大規模な配石遺構や高根町青木遺跡・石堂遺跡の石棺墓群などがこの時期に見られる。晩期終末から弥生時代始めにかけては遺跡数は増加し、特に東海地方の条痕文系土器を持つ遺跡が多く、伊那谷から諏訪、そして八ヶ岳西麓を通して土器が搬入されたことがわかる。しかし、これに続く中期後半から後期にかけての遺跡はほとんど発見されておらず、初期の水田耕作が標高1000mに近いこの地に適さなかったことが考えられる。古墳時代に関してはこれまでに小淵沢町内においては古墳は発見されていないが集落が少数発見されている。南西2.5kmの宝ヶ森遺跡などがある。奈良・平安時代になると再び遺跡が増加するが、これは北巨摩郡下に官牧が3カ所置かれ八ヶ岳山麓の開発が行われたことに関係するとの説もある。また、中世には笹尾砦が築かれ八ヶ岳山麓には棒道が整備されて軍事的に重要な役割を果たしている。

3 調査方法

篠八田遺跡の発掘は、八ヶ岳広域農道建設事業に先立つ記録保存を目的とした調査である。調査対象地域は八ヶ岳南麓に広がる雄大な台地で、現状は畑として利用されており、調査対象面積は、360㎡である。本遺跡は、平成3年度の試掘調査によって縄文時代中期後半の遺物が確認されている。

発掘区の設定は第20図に示した通りである。本来ならば女取川沿いの東斜面も発掘すべきで



第 20 図 発掘区全体図(1/500)

あったが、試掘調査においてこの地点が女取川の旧河道であることが確認されたので発掘調査は行わなかった。排土の関係から調査区を東西に二分し、まず西側部分より発掘を開始した。表土は原則として重機により除去し遺構確認面直上から人力で精査し遺構の確認に努めた。グリットは、

南から北に向かって A・B・C・D、西から東に向かって 1～7 とし 4 m 四方のグリットを設定した。遺構確認が困難なために第 1・2 トレンチを設定し確認作業を行った。西側の調査終了後に排土を重機により反転し東側部分の調査を行った。グリットは西側部分で設定したグリットを延長し西から東に向かって 8～10 とし、南から北に向かっては西側部分と同様に A・B・C・D とした。東側部分においてはローム層上面に流路が幾筋も流れており、この流路と発見された住居址との関係をつかむためにローム層上部まで掘り下げて発掘を行った。遺物については遺構確認面に到達するまでは、各グリットごとに取り上げた。遺構内出土の遺物については光波測量機および小型コンピューターを用いて取り上げ、これらのデータをもとに整理作業を行った。

4 基本層序

遺跡は八ヶ岳南麓に立地しており、全体的には緩やかに南に傾く平坦面をなしているが、発掘区の東側部分は、女取川に向けて東に傾く比較的急な傾斜面となっており、やや厚く層が堆積しており、遺跡の東側と西側地点においては若干異なった層序が見られる。ここでは発掘区北側壁面において確認された層序を基本層序として取り上げたい。層序は基本的に 4 層に分類できる。

I 層は表土（耕作土）。黒色土でしまりがあり、粘性がややある。II 層は明茶褐色土。しまり、粘性がともにあり、暗茶褐色土が斑状に含まれている。II 層上面は凹凸が激しく、耕作時による影響と思われる。また、II 層は遺跡の東側部分（東傾斜面）のみで確認されている。III 層は暗茶褐色土。しまりがあり、粘性がやや強い。カーボンが斑状に少量、また赤色粒子が少量含まれる。III 層は比較的安定した層であり、遺跡全体に見られる。IV 層は暗茶褐色土。しまりが弱く、粘性がややある。ロームを多く含む漸移層である。

なお、発掘区西側部分と 1 号住居址部分には北西から南東方向へ流れる自然の流路が検出さ

れている。この流路はⅣ層下部のローム層を削り込んでおり人頭大の礫が多量に流れ込み、最後に黒色土が堆積している。このような流路が遺跡の立地する河岸段丘上に幾筋も存在していると思われる。

遺構の確認される層位はⅣ層上面であり、基本的にこの層を遺構確認面として捉えることができる。また、遺物に関してはⅢ層以下より出土している。

第3節 遺構と遺物

1 概要

篠八田遺跡は周知の遺跡（曽利期）として知られ、また平成3年度の試掘調査により縄文時代中期後半の遺物が確認されていることから、今回の調査においても同時期等の遺構および遺物が検出されるものと期待された。しかし、遺構としては縄文時代中期後半の曽利期の住居址が1軒のみ確認されただけであり、また遺物に関しても同時期のものを中心に少量出土したのみである。なお、今回確認された住居址は北側の一部が発掘区外へ伸び、また遺跡周辺の遺物分布状況などから遺跡の主体は本調査区より北側になるものと思われる。

2 住居址

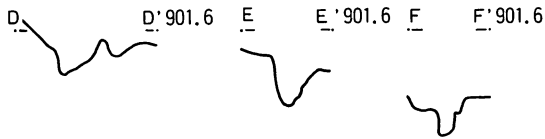
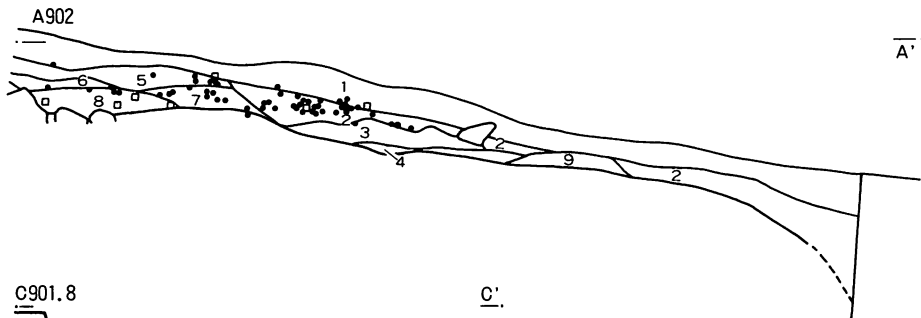
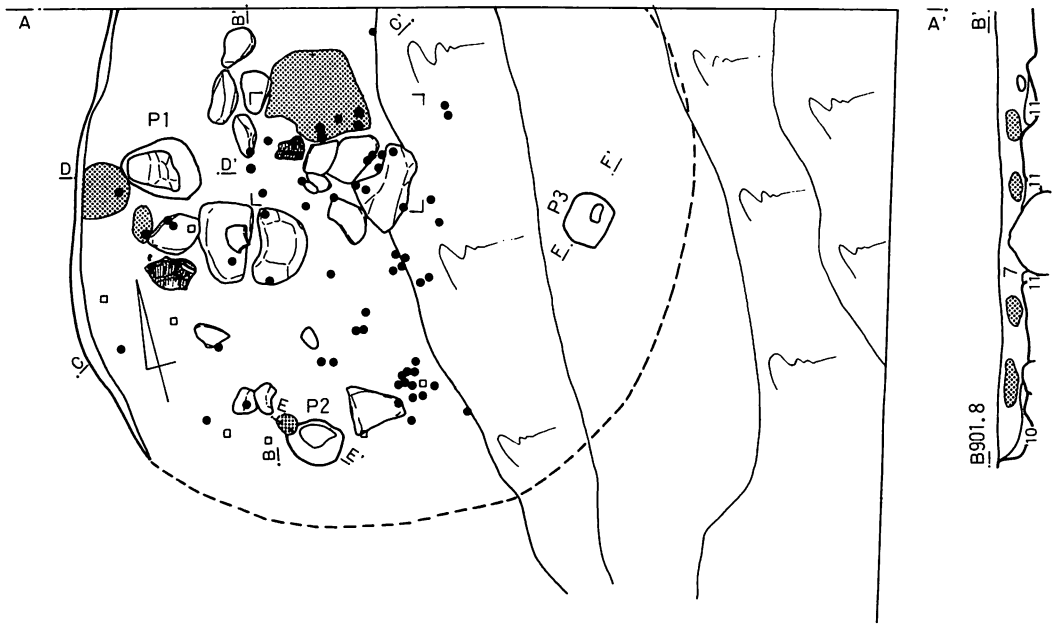
〔位置〕 8・9-B・Cグリットに位置し、北壁の立ち上がりは発掘区外へ伸びている。

〔形状・規模〕 平面形態は水害等による影響で東壁および北壁の立ち上がりの確認が困難であるが、主軸方向を北北西にとる楕円形と推定される。住居規模は東西推定5m、南北推定6mである。

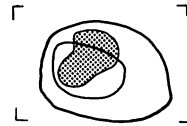
〔床面・壁〕 本住居址は廃絶後あるいは存在中に水害を受けているため、床面は凹凸が激しく荒れており、一部のみ硬くしまった張り床部が残存している状態である。また東壁も床面と同様に削られて残存状況は悪い。西壁の比較的残りの良い部分では壁高が40cmを計る。住居址内には人頭大の石が多量に検出され、これらの石の下部には黒色土が入り込んでいるため、流れ込みによるものと思われる。覆土下部にはカーボン・焼土および砂粒子が多量に混入している。周溝および埋甕は検出されていない。

〔炉〕 炉は住居址のほぼ中央部に位置し、石組炉の形態をとっていると思われる。石組部は40cm四方の台形に近い形をした厚さ6cmの2枚の石が、逆ハの字状に床面と同じレベルに崩れている状態で検出されており、この石組部の上部には焼土が10cmほどの厚さで見られた。また石組部の下部には炭化物を含む黒色土を挟んで掘り込み部が見られ、床面を20cm程皿状に掘りくぼめた形態をとり、火気使用痕が確認された。

〔その他の施設〕 本住居址の床面は凹凸が激しく荒れているためピットの確認は難しいものであったが確実に本住居址に伴うと思われるピットは3個あり、それぞれ柱穴になると思われる。ピット1は50×64×30を計り、底部には40cm大の石が見られた。ピット2は34×44×36、ピット3は34×40×30を計る。



1. 黒色土 (表土・基本層序I) しまり有り、粘性やや有り。
2. 黒色土 しまり有り、粘性に欠ける。
3. 暗茶褐色土 砂粒子多量混入、しまり強く、粘性に欠ける。
4. 砂利層 5cm大の石が混入。
5. 暗茶褐色土 (基本層序III) カーボン少量斑状に混入、赤色粒少量混入、しまり有り、粘性やや強し。
6. 暗茶褐色土 (基本層序IV) ロームブロック混入、しまり弱く、粘性やや強し。
7. 暗茶褐色土 ロームブロック混入、カーボン、焼土少量斑状に混入。
8. 黄白色土 (張り床部) 白色粘土混入。
9. 暗茶褐色土 ロームブロック混入、しまり、粘性に欠ける。
10. 暗茶褐色土 (崩落土) ロームブロック混入、しまり有り、粘性に欠ける。
11. 暗茶褐色土 砂粒子多量混入、ローム粒子混入、しまり強く、粘性に欠ける。



地床炉

第 21 図 1号住居址

遺物

a 土器 (第22図)

1号住居址から出土した土器は、合計71点であった。前述したように遺構の残りがよくなかったために、出土した土器もこの時期にしては少なかった。出土した土器はほとんどが中期後半、曾利式期に属すると思われるものであった。住居址の東半分は流されているため遺物の出土は西半分に偏っている。また、第1層(表土)からはほとんど出土せず、床面から20cmの間に集中した。

1・2はどちらも大型の土器で、1は口縁部径が54cm(推定)に達する。床面付近から出土しており、当住居址の時期を決定する有効な資料である。1は器面を懸垂文により8等分して、この間を刷毛目状の集合沈線で埋めている。口縁部の楕円区画も8区画である。内面は丁寧に研かれており、胎土には白色の鉱物を含む。施文順序は、口縁部の区画→胴部の沈線文→懸垂文の順である。2は全体的に作りが雑で、器壁が厚く、胎土に白色の鉱物を多く含む。器面の懸垂文は隆帯の貼り付けで施文されており、沈線は一本ずつ深く引かれている。施文順序は、懸垂文による区画→胴部の沈線→頸部～口縁部の沈線→頸部付近の隆帯の順である。いずれも曾利Ⅲ式に属するものである。3～12も同時期の所産と思われる。11は地文に撚糸を用いた、丁寧な作りの土器である。

b 石器 (第22図)

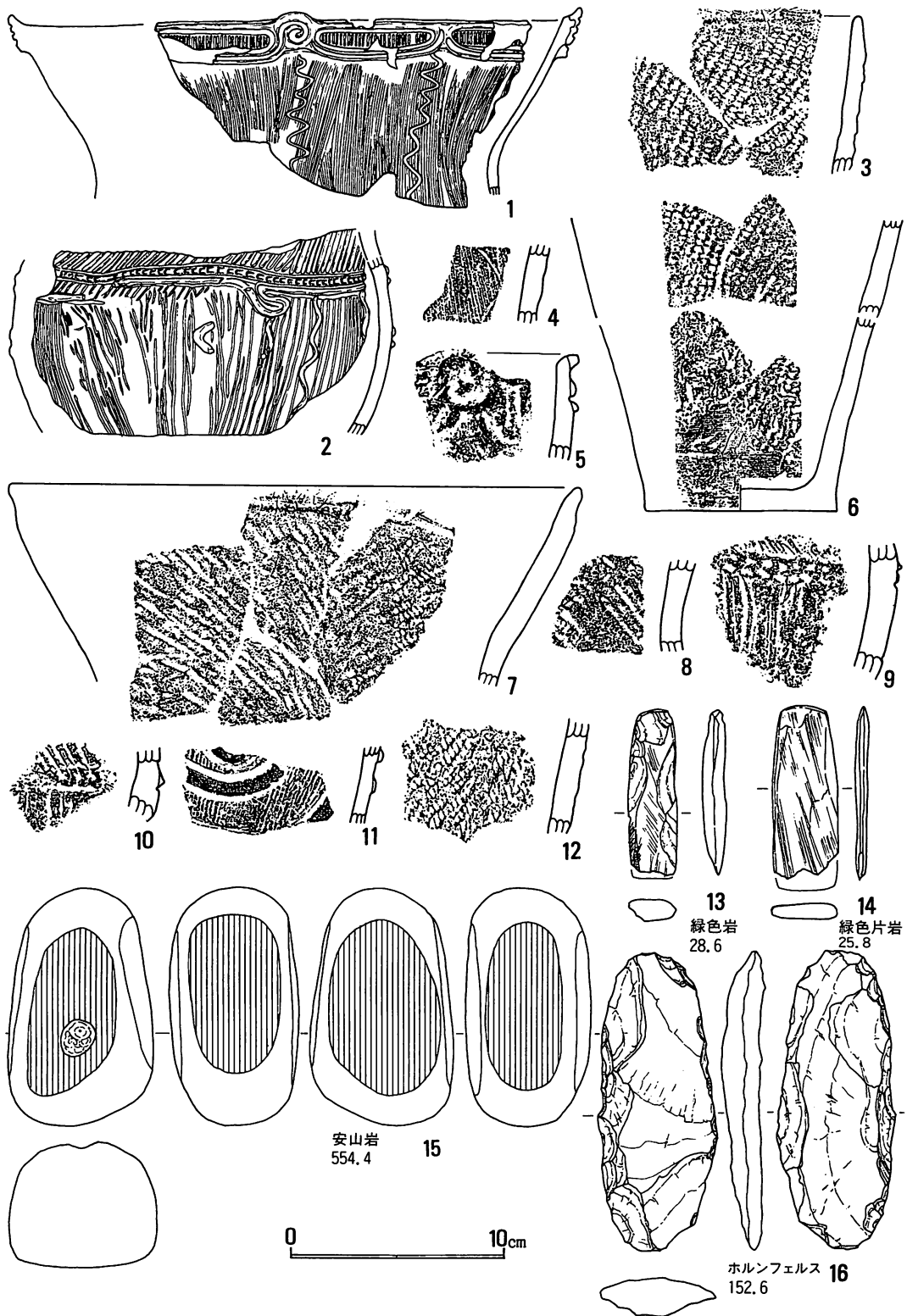
1号住居址から出土した石器は、図示した4点ですべて(ただし、遺構図内のドットは剥片まで含めてあるので7点となっている)である。13・14は磨製石斧、15は磨り石、16は打製石斧である。13は丁寧に研いで作ってあるが、表面裏面ともに多くの剥離が見られ、刃部は欠損している。床面付近より出土している。14は13に比べると薄い。やはり刃部の欠損が見られる。床面から10cmほど浮いて出土した。15は、凹のない3面がよく磨かれている。15・16は床面付近から出土している。

3 遺構外の出土遺物

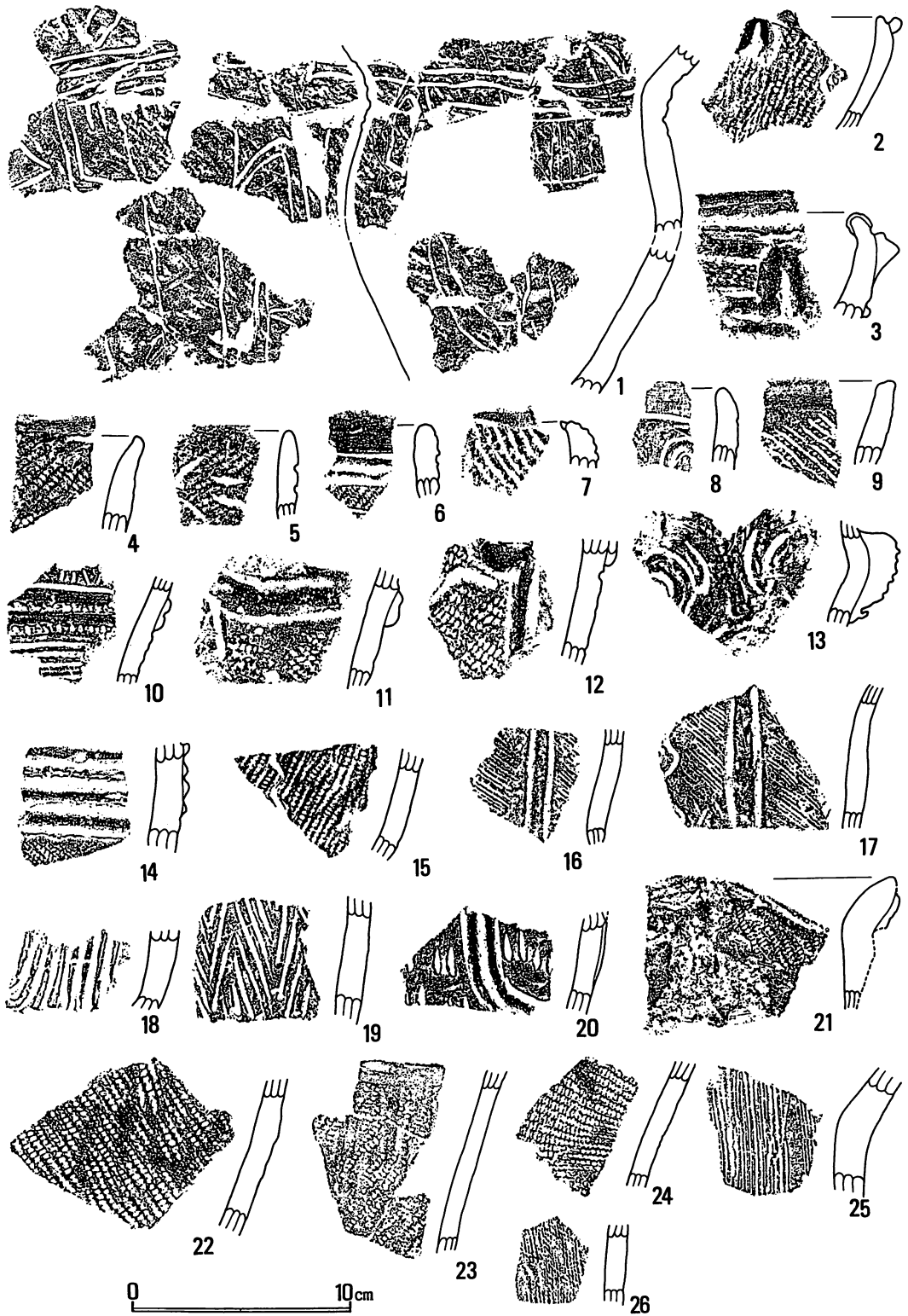
a 土器 (第23図)

遺構外出土の遺物は、所属時期が不明なものを除いて全て曾利式期のものであった。数量的には多くなく、蜜柑箱大の整理箱に2箱ほど(石器類を含む)であった。特に集中する箇所も見られなかったが、8-Bグリッド(住居址すぐ西)からややまとまって出土した土器は23図の1として1個体にまとまった。

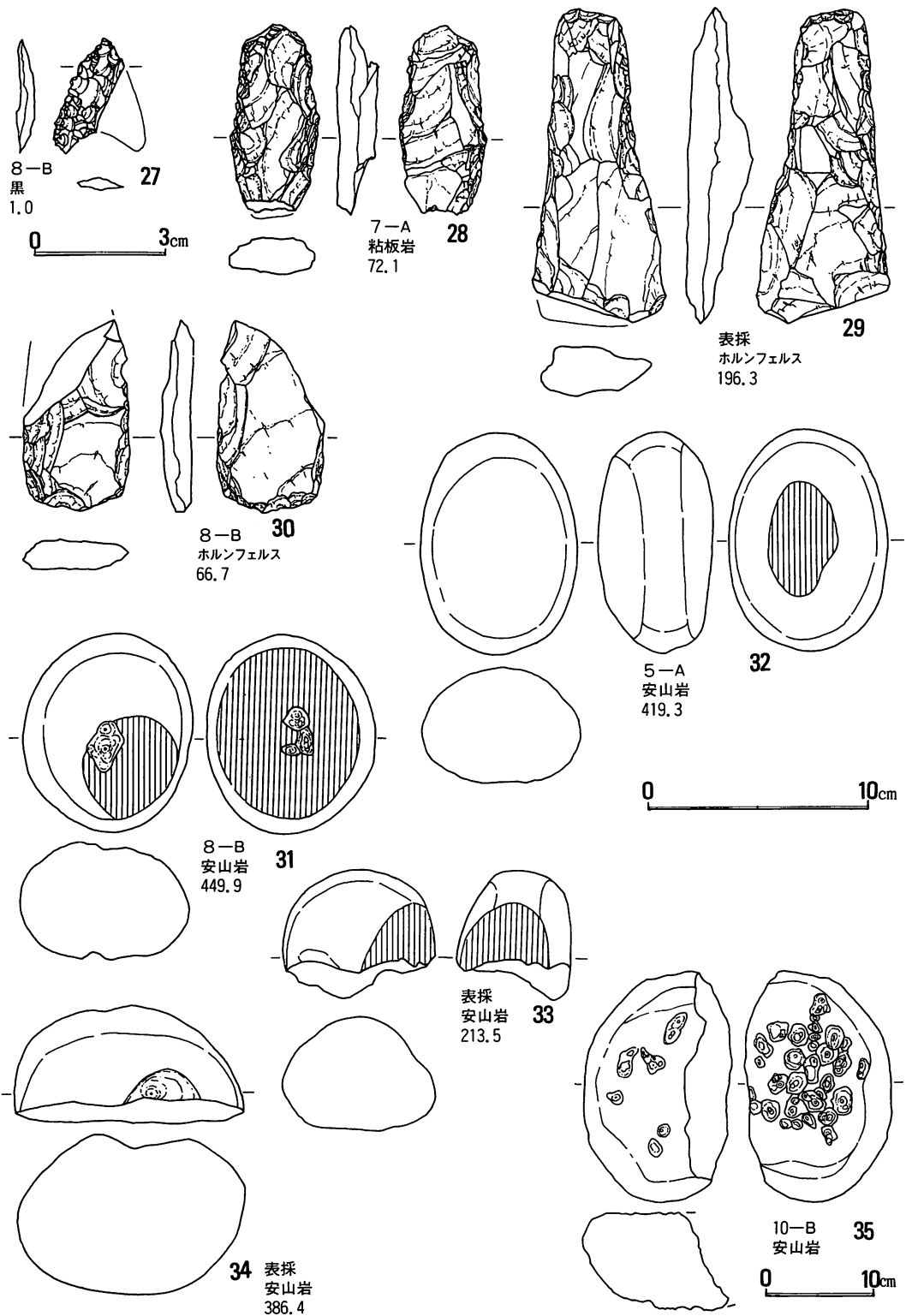
1は赤褐色～黒褐色で、胎土に白色の粒子を多く含む厚手のやや脆い土器である。胴部しか残っておらず、器形は完全にはわからない。文様は無節の縄文を地文とし、これに沈線(やや太めの断面U字のものと、細い断面V字のものとの2種類)で施文している。一部に中期初頭的な文様要素をもつが、曲線的な文様もあり全体的なモチーフはわからない。全体的に雑なつくりの土器である。所属時期は確定しがたい。住居址のすぐ脇から出土しているが、住居址との関連は不明である。9は付加条の縄文をもつ。13は大きく貼りつけた耳状の隆帯の上に、棒



第 22 図 1号住居址出土遺物



第 23 图 遺構外出土遺物 (1)



第 24 図 遺構外出土遺物 (2)

状工具により刺突文を縦に並べている。21は隆帯が貼付してあったと思われる跡がのこっている。26は撚糸文が施されている。

b 石器（第24図）

出土した石器は10点で、1点は試掘の際の出土である。内訳は、石鏃1点、打製石斧4点、磨石・凹石4点、多凹石（石皿）1点である。他に黒曜石のフレイク・チップが数点出土している。35はいわゆる「多凹石」であるが、石皿としても利用していたようである。

第4節 まとめ

本遺跡で確認された遺構は住居址1軒のみであり、出土した遺物は曾利期の土器片が主体を占め、量的には少かった。

今回の調査で唯一検出された遺構である1号住居址は出土遺物より縄文時代中期の曾利Ⅲ式期に属すと考えられる。本住居址の検出状況は床面の凹凸が激しく荒れており一部のみ張り床が残存し、東壁および北壁の立ちあがりも削られており、また住居址内には人頭大の石が多量に検出された状態であり、この状況より本住居址が廃絶後あるいは存在中に水害を受けたのではないかと推察される。この水害については第1章西の入遺跡（第4節のまとめの頁）で述べたように八ヶ岳南麓における遺跡のあり方との関わり、すなわち「遺跡数の急激な増加を見せる縄文時代中期に対して後・晩期の遺跡が減少する傾向の要因の一つとしてこの水害という自然現象が考えられる」という可能性について述べたが、本遺跡の場合も住居址が縄文時代中期の曾利Ⅲ式期に比定されることより、この可能性を首肯する一つの事例になると思われる。また本住居址の特徴の一つとして炉の形態が石組炉になると思われることが上げられる。炉の検出状況は深さ20cm程の掘り込み部が住居址中央やや西壁よりに見られ火気使用痕がはっきり認められ、この上部に炭化物を含む黒色土を挟んで厚さ6cmほどの2枚の石が逆ハの字状に掘り込み部の内部に崩れ落ちるかたちで見られ、さらにこの上部に焼土が10cm程検出された（第21図）。この検出状況より上部の石組部になると思われる箇所は水害等の影響により崩されたと考えられ、その結果逆ハの字状に2枚の石が掘り込み部の内部に崩れ落ち、また焼土が上部で確認されたと思われる。また、住居址内には平坦面を持つ大きめの石が散見され、これらも掘り込み部の外縁を囲むように配石されていたと思われる。上部の石組部は方形またはコの字形などの形を取るものと考えられる。この方形などの石組炉は縄文時代中期、特に曾利期において中部・関東周辺に多数発見されている。

以上今回の調査のまとめについて述べたが、確認された遺構が住居址1軒であり遺跡全体での位置付けは捉えられなかったが、1号住居址が発掘区外の北側に伸びている点や、また周知の遺跡としての篠八田遺跡（昭和58年『小淵沢町の原始古代遺跡一分布調査報告書』による）が今回の調査区の北側に位置している点などを考慮すると、本遺跡の主体が北側にあり、今後検出される可能性が大きいと言えるのではないだろうか。

版 圖



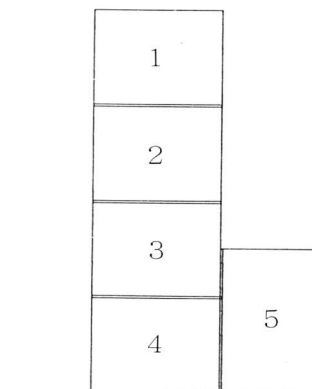
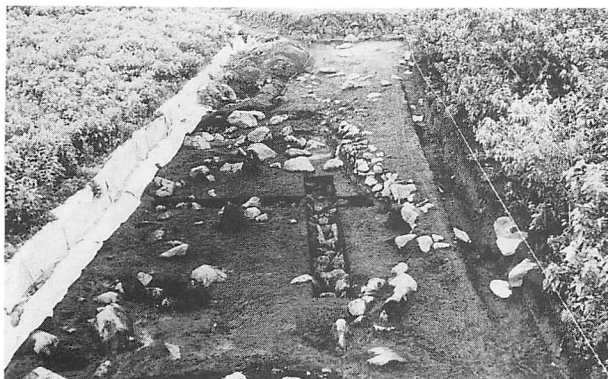
西の入遺跡遠景



西の入遺跡イ区
発掘前風景

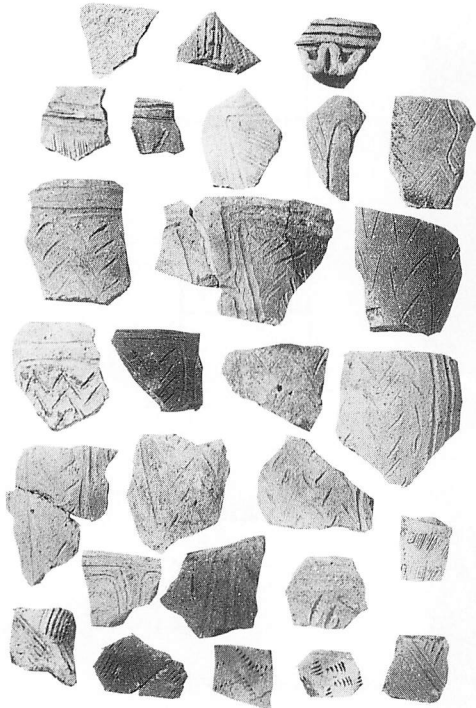


西の入遺跡イ区
調査風景

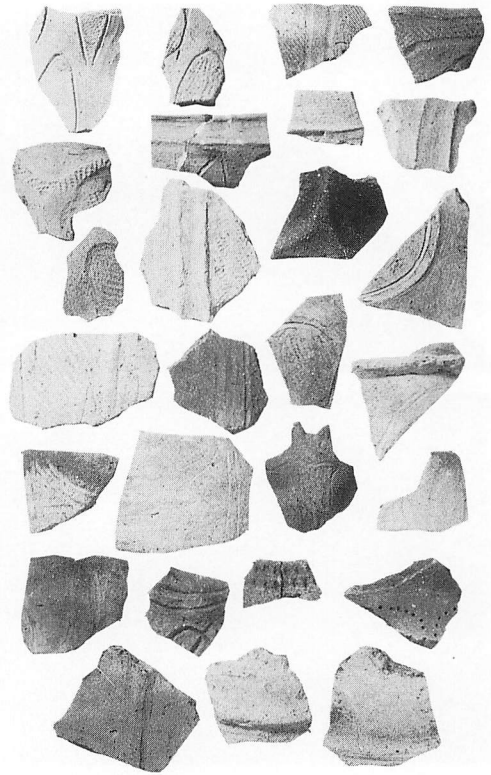


- 1、西の入遺跡イ区
- 2、 " ロ区
- 3、 " ニ区1号土坑
- 4、 " ニ区1号溝
- 5、 " ニ区(西半分)

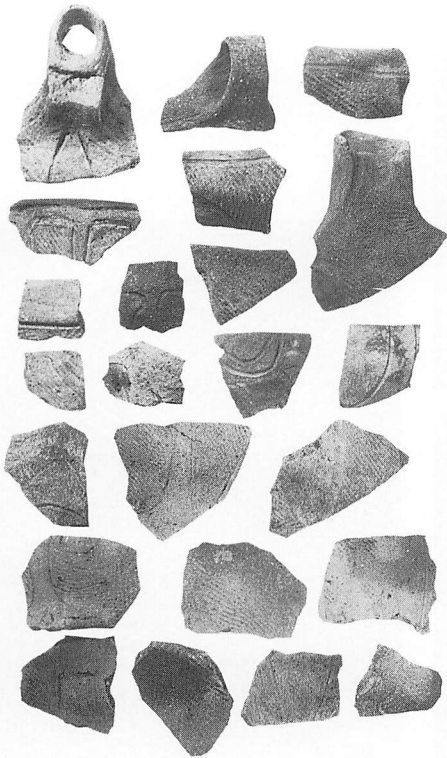




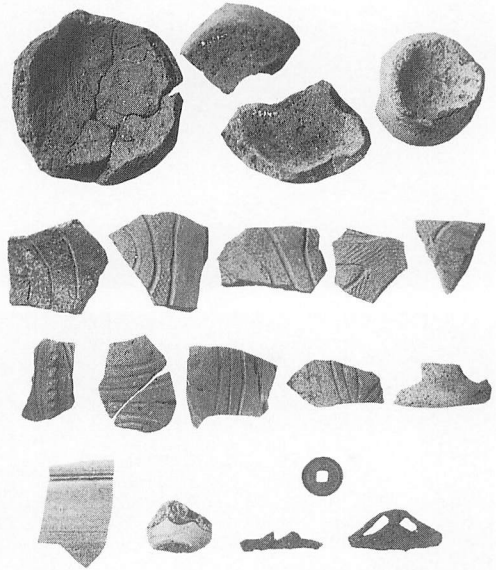
西の入遺跡 イ区出土遺物



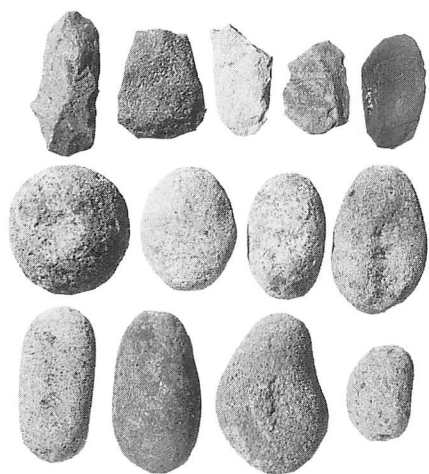
西の入遺跡 イ区出土遺物



西の入遺跡 イ区出土遺物



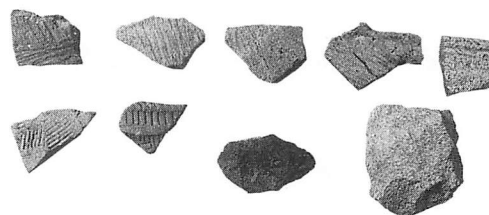
西の入遺跡 イ区出土遺物



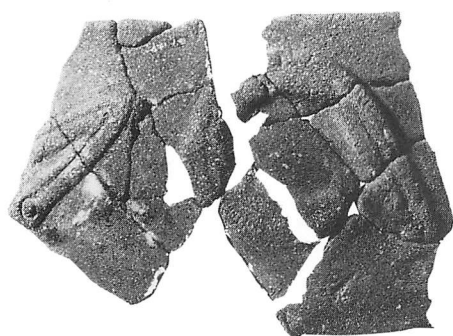
西の入遺跡 イ区出土石器



西の入遺跡 イ区出土石器



西の入遺跡 1号溝出土遺物



西の入遺跡 1号土坑出土遺物



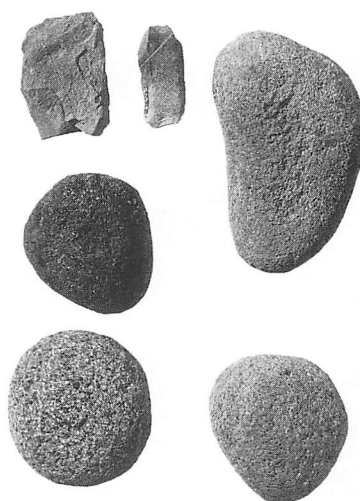
西の入遺跡 ロ区・ハ区出土遺物



西の入遺跡 1号土坑出土遺物



西の入遺跡 ニ区出土石器



西の入遺跡 ニ区出土石器



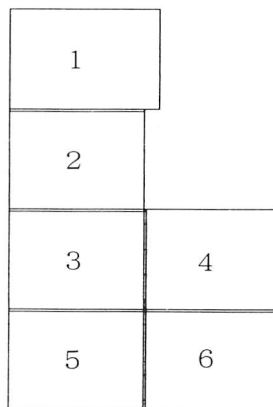
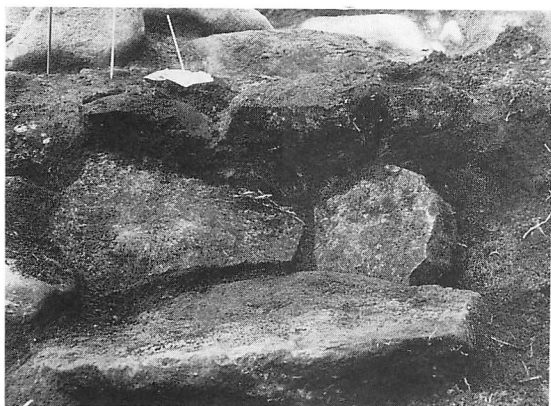
篠八田遺跡発掘風景
(西半分)



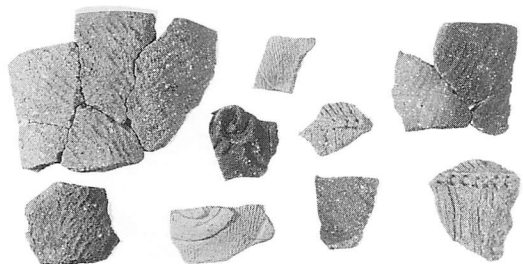
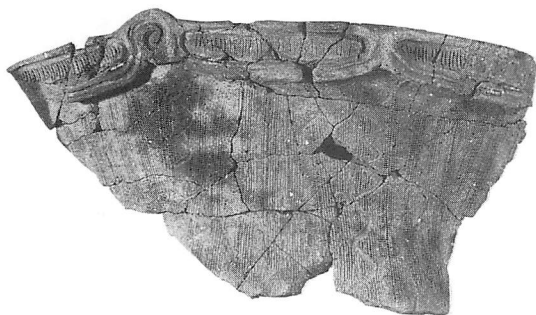
篠八田遺跡、西半分
およびトレンチ

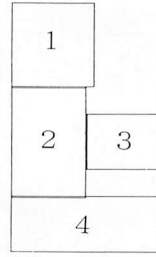
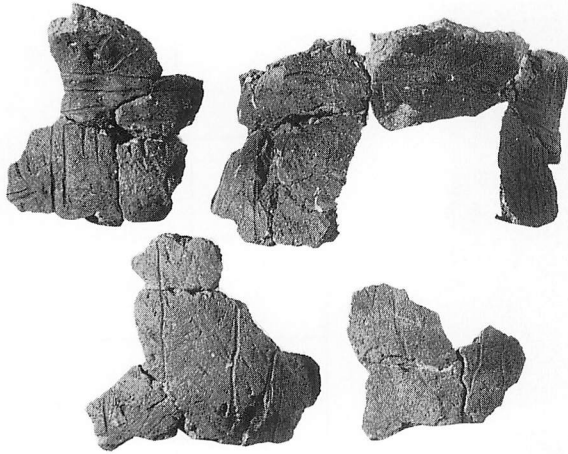


篠八田遺跡発掘風景
(東半分)



- 1、篠八田遺跡1号住居址
- 2、 " 1号住居址炉
- 3、 " 1号住居址出土土器
- 4、 "
- 5、 "
- 6、 " 1号住居址出土石器



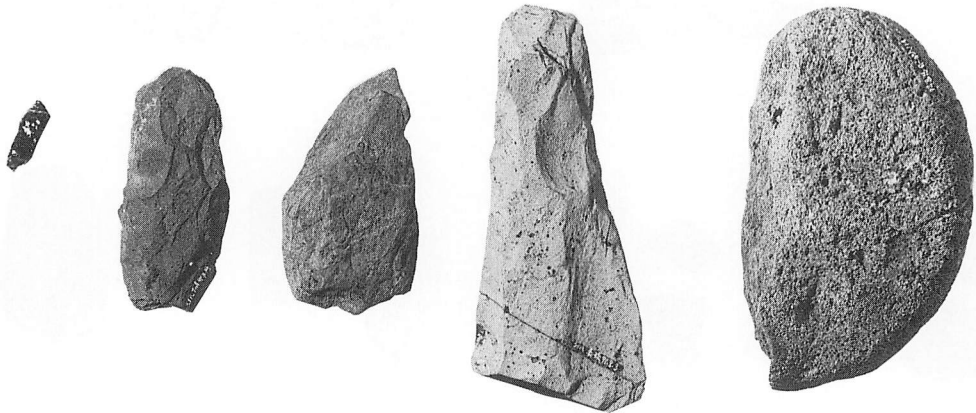
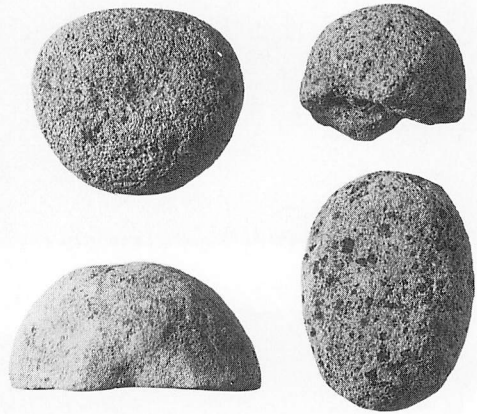
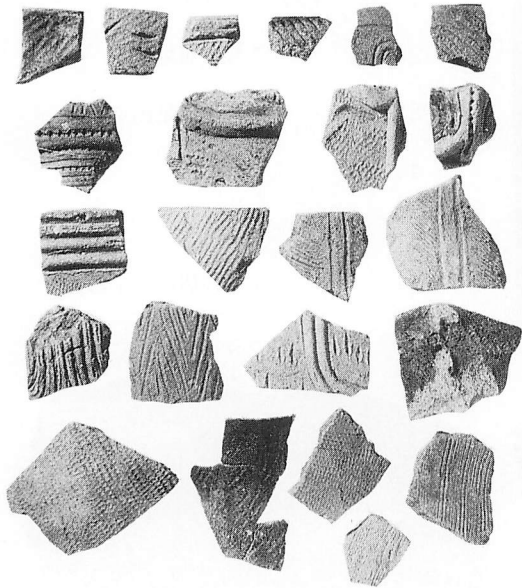


1、篠八田遺跡出土土器

2、 ”

3、 ” 出土石器

4、 ”



報告書コンピュータ入力用フォーマット

フリガナ	ニシノイリイセキ シノハツタイセキ		
書名	西の入遺跡・篠八田遺跡		
副題	ハケ岳広域農道建設に伴う発掘調査報告書		
シリーズ	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第68集		
主著者・従業者	保坂和博・浅利司		
発行者	山梨県教育委員会・山梨県農務部		
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター		
住所・電話	山梨県東八代郡中道町下曾根 923	0552-66-3881	
印刷所	山梨県中巨摩郡白根町百々 1666-40 (有) 新星堂印刷		
印刷日・発行日	1992年3月20日	1992年3月31日	
フリガナ	所在地	山梨県北巨摩郡高根町堤字西の入	
西の入遺跡	25000分の1地図名・位置	谷戸	北緯35°51'12" 東経138°25'10"
概要	主な時代	縄文時代中期後半(曾利式期)	
	主な遺構	土坑1、溝状遺構1	
	主な遺物	土器、石器、陶磁器、古銭、火うち金	
	特殊遺構 特殊遺物		
	調査期間	1991年5月20日～1991年7月31日	
フリガナ	所在地	山梨県北巨摩郡小淵沢町上笹尾郡篠八田	
篠八田遺跡	25000分の1地図名・位置	小淵沢	北緯35°51'28" 東経138°20'54"
概要	主な時代	縄文時代中期後半(曾利式期)	
	主な遺構	住居址1基	
	主な遺物	土器、石器	
	特殊遺構 特殊遺物		
	調査期間	1991年8月5日～1991年9月31日	

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第68集

にし いり しのはった
西の入遺跡・篠八田遺跡

印刷日 平成4年3月20日

発行日 平成4年3月31日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県東八代郡中道町下曾根 923

TEL 0552-66-3881・3016

発行所 山梨県教育委員会

印刷所 (有) 新星堂印刷

